

第 1 1 章

主クリシュナ、 ドウヴァーラカーに入る

第 1 節

सूत उवाच

आनर्तान् स उपव्रज्य स्वृद्धाञ्जनपदान् स्वकान् ।
दध्मौ दरवरं तेषां विषादं शमयन्निव ॥ १ ॥

スータ ウヴァーチャ
sūta uvāca

アーナルターン サ サ ウパヴラッジャ
ānartān sa upavrajya

スヴリッダハーン ジャナ・パダーン スヴァカーン
svṛddhāñ jana-padān svakān

ダドフウマウ ダラヴァランム テーシャーンム
dadhmau daravaram teṣān

ヴィシャーダム シヤマヤン- イヴァ
viśādam śamayann iva

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *ānartān*—アーナルターン (ドウヴァーラカー) として知られる国; *saḥ*—主; *upavrajya*—~の国境に到着して; *svṛddhān*—非常に繁栄した; *jana-padān*—都市; *svakān*—主の; *dadhmau*—鳴らした; *daravaram*—吉兆な法螺貝 (パーンチャジャニヤ) ; *teṣān*—彼らの; *viśādam*—失意; *śamayann*—やわらげている; *iva*—見たところ。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「アーナルタス国 (ドウヴァーラカー) という名で知られる繁栄をきわめた自らの都市の国境に到着した主は、住民たちの悲しみをやわらげるかのように、吉兆な法螺貝を吹き鳴らして帰還を知らせた」

要旨解説

人々に愛される主は、クルクシェートラの戦争に加わるため、繁栄をきわめる自分の都市ドウヴァーラカーをかなりのあいだ離れて過ごしており、市民たちは主との別れの悲しみにつつまれていました。主が地上に降誕したとき、王の側近のように、永遠な交流者たちも共

に地上に誕生します。そのような交流者は永遠に解放された魂であり、主への深い愛情のために、ほんの一瞬たりとも離れていることに耐えられません。だからこそ、ドウヴァーラカーの住民は失意のなかで主の帰りをいまかいまかと待ちつづけていたのです。ですから、帰還を知らせる吉兆な法螺貝の音は、長いあいだつらい思いをしてきたかれらの気持ちを生きかえらせました。住民たちは主との再会を強く願っていましたから、帰ってきた主をふさわしい方法で出迎えたいと思いました。これが、神への自然な愛情の印です。

第2節

स उच्चकारे धवलदरो दरो
 ऽप्युरुक्रमस्याधरशोणशोणिमा ।
 दाध्मायमानः करकञ्जसम्पुटे
 यथाब्जखण्डे कलहंस उत्स्वनः ॥ २ ॥

サ ウッチャカーシェー ダハヴァローダロー ダロー
sa uccakāṣe dhavalodaro daro

ピ ウルクラマッシャーダハラショーナ・ショーニマー
'py urukramasyādharaśoṇa-śoṇimā

ダードウマーヤマーナハ カラ・カンジャ・サンムプテー
dādhmāyamānaḥ kara-kañja-samputē

ヤタハーブジャ・カハンデー カラ・ハンムサ ウトウスヴァナハ
yathābja-khaṇḍe kala-hamsa utsvanaḥ

saḥ—それ; *uccakāṣe*—鮮やかなになった; *dhavala-udaraḥ*—白く、ふっくらした腸; *darah*—法螺貝; *api*—たとえそうであっても; *urukramasya*—偉大な冒険家の; *adharaśoṇa*—主の唇の超越的な質によって; *śoṇimā*—赤くなって; *dādhmāyamānaḥ*—鳴らされて; *kara-kañja-samputē*—蓮華の手ににぎられて; *yathā*—そのように; *abja-khaṇḍe*—蓮華の花の茎によって; *kala-hamsaḥ*—水に浮かぶ白鳥; *utsvanaḥ*—高らかに鳴っている。

白く、そして太い腸のような法螺貝は、主クリシュナの手ににぎられて吹きならされ、主の超越的な唇に触れたことで赤みがかって見える。あたかも、白い白鳥が赤い蓮華の花の茎のなかで戯れているかのように。

要旨解説

主の唇に触れたことで白い法螺貝が赤みがかって見えたことは、精神的な重要性の象徴で

す。主は完全に精神的な方であり、物質はこの精神的存在に関する無知ゆえに生じます。精神的悟りを持つ人にとって、物質などというものは存在せず、そしてその精神的啓発は至高主シュリー・クリシュナとの接触によってすぐに得られます。主は全創造界の隅々に存在し、自らをだれにでも現わすことができます。熱烈な愛情と主への奉仕によって、言いかえれば、主との精神的接触によって、すべては主の手ににぎられた法螺貝のように精神的に赤くなり、高い知性をそなえたパラマハンサ (paramahansa) は、主の蓮華の御足によって永遠に満たされた精神的至福のなかで、水に浮かぶ白鳥のように戯れるのです。

第3節

तमुपश्रुत्य निनदं जगद्भयावहम् ।
प्रत्युद्ययुः प्रजाः सर्वा भर्तृदर्शनलालसाः ॥ ३ ॥

タンム ウパシュルツチャ ニナダンム
tam upaśrutya ninadam

ジャガドゥ・バハヤ・バハヤヴァハンム
jagad-bhaya-bhayāvaham

プラテュデヤユフ プラジャーハ サルヴァー
pratyudyayuh prajāḥ sarvā

バルトウリ・ダルシャナ・ラーラサーハ
bharṭṛ-darśana-lālasāḥ

tam—その; *upaśrutya*—聞いて; *ninadam*—音; *jagat-bhaya*—物質存在の恐れ; *bhaya-āvaham*—威嚇の原則; *prati*—〜に対して; *udyayuh*—速く進んだ; *prajāḥ*—市民たち; *sarvāḥ*—だれも; *bharṭṛ*—保護者; *darśana*—聴衆; *lālasāḥ*—そのように望んで。

ドウヴァーラカーの市民は、物質界の恐怖の権化さえも恐れさせるその音を聞き、主に向かって全速力で走っていった。あらゆる献愛者を守る主に長いあいだ会いたいと願いつづけてきた望みを満たすために。

要旨解説

すでに説明したように、主クリシュナが地上にいたときの都・ドウヴァーラカーの市民は、解脱の境地にある魂ばかりで、主の身近な交流者として主とともに降誕していました。精神的つながりという点からすれば、だれも主と離れてはいないのですが、かれらは主に会う言葉ばかり考えていました。ヴリンダーヴァンのゴープーは、主クリシュナが牛の世話のために村から離れているときもずっと主のことを考えていましたが、そのゴープーのように、ド

ウヴァーラカーの市民も、主がクルクシェートラの戦争に行っていたあいだ、ずっと主のことを考えていました。ベンガル地方で名の知れた小説家たちのなかには、ヴリンダーヴァンのクリシュナと、マトウラーのクリシュナと、ドウヴァーラカーのクリシュナは別人だと言う者がいます。しかし、史実から見てその結論は正しくありません。クルクシェートラのクリシュナとドウヴァーラカーのクリシュナは、まったく同じ人物なのです。

ドウヴァーラカーの市民は、主がこの崇高な都にいないことから、ふさいだ気持ちで暮らしていました。日中、太陽が出ていないときに気がふさぐように。主クリシュナが告げた音は、日の出のまえぶれのような音に響きました。だから市民は、主を迎えるためにいそいで外に出てきました。主の献愛者は、主以外に自分を守ってくれる人を知らないのです。

主が吹きならしたこの音は、これまで主の非二元性について説明してきたとおり、主そのものです。いま私たちが住んでいる物質存在は恐れに満ちています。食糧、保護、恐れ、子孫という物質存在の4つの問題のなかで、恐れの問題は他の3つよりも私たちに苦しめます。次の瞬間にどのような問題が待ちかまえているかを知らない私たちは、いつもなにかを恐れています。全物質存在に問題が渦巻いているため恐れの問題がもっとも顕著になっています。これは、私たちが主の幻想エネルギー、つまりマーヤーとかかわっているからですが、どのような恐れでも、主の聖なる名前を象徴する音が現われるとき、またたくまに消えさります。それが主シュリー・チャイタンニャ・マハーラブが鳴らした次の16の言葉です。

ハレー クリシュナ、ハレー クリシュナ、クリシュナ クリシュナ、ハレー ハレー、
ハレー ラーマ、ハレー ラーマ、ラーマ ラーマ、ハレー ハレー
私たちはこの音を活用し、物質存在にある恐ろしい問題から解放されるのです。

第4-5節

तत्रोपनीतबलयो रवेर्दीपमिवादृताः ।
आत्मारामं पूर्णकामं निजलाभेन नित्यदा ॥ ४ ॥
प्रीत्युत्फुल्लमुखाः प्रोचुर्हर्षगद्गदया गिरा ।
पितरं सर्वसुहृदमवितारमिवार्भकाः ॥ ५ ॥

タトウローパニータ・バラヨー
tatropanīta-balayo

ラヴェール ディーパム イヴァードウリターハ
raver dīpam ivāḍṛtāḥ

アートウマーラーマンム プールナ・カーマンム
ātmārāmaṁ pūrṇa-kāmaṁ

ニジャ・ラーベヘーナ ニチャダー
nija-lābhena nityadā

プリーティ・ウトウプフルラ・ムカハーハ プロージュル
prīty-utphulla-mukhāḥ procur

ハルシャ・ガドウガダヤー ギラー
harṣa-gadgadayā girā

ピタランム サルヴァ・スフリダムム
pitaram sarva-suhṛdam

アヴィターランム イヴァールバハカーハ
avitāram ivārbhakāḥ

tatra—そこで; *upanīta*—捧げて; *balayaḥ*—贈り物; *raveḥ*—太陽に; *dīpam*—ランプ;
iva—～のような; *ādṛtāḥ*—評価されて; *ātma-ārāmam*—自己充実した方に;
pūrṇa-kāmam—完全に満足して; *nija-lābhena*—主の力によって; *nitya-dā*—絶え間なく
供給する方; *prīti*—愛着; *utphulla-mukhāḥ*—快活な顔; *procuḥ*—言った; *harṣa*—喜んで;
gadgadayā—夢中で; *girā*—会話; *pitaram*—父親に; *sarva*—すべて; *suhṛdam*—友;
avitāram—保護者; *iva*—～のような; *arbhakāḥ*—被保護者。

主のまえに辿りついた市民は、完全に自ら満たされ、自己充実し、自らの力で絶え間なく人々に供給するその方に、贈り物を差しだした。それは太陽に向かってランプの光を捧げるようなものである。それでも市民は、歓喜の言葉を口にしながら主を迎えた。幼い者が保護者や父親を迎えるように。

要旨解説

至高主クリシュナは、ここでアートウマーラーマ (*ātmārāma*) と呼ばれています。主は自ら充実し、自分以外の源から幸福を求める必要はありません。主が自己充実しているのは、主の超越的存在そのものが完全な至福に満たされているからです。主は永遠に存在しています。主はすべてを認識し、あらゆる面で至福に満ちあふれています。ですから、どれほど高価な贈り物を主にしても、主が必要としているものではありません。それでも万民の幸福を願う方ですから、純粋な献愛奉仕として捧げられたものは、なんでも、だれからでも受けられます。主はそのような物を持っていないわけではありません。主が自分の力を使って作りだした物なのです。この節ではその例がしめされてあり、主になにかを捧げることは、太陽神を崇拝するときにランプで火を捧げる行為に似ていると表現されています。火がついたもの、あるいは光っているものはどれも太陽の力の表われですが、太陽神を崇拝するにはランプの火を捧げなくてはなりません。太陽の崇拝は、崇拝者がなにかを要求しているのですが、献愛奉仕ではどちら側にもそのような要求はありません。中心になっているのは、主と献愛者との純粋な愛情や愛着の交換です。

主は全生命体の至高の父親ですから、この神との力強い絆について知っている人は、至高

の父親に子どもとしてなにかを要求できますし、父親は取引などせずに従順な子どもの要求に応じてくれます。主はまさに望みの木であり、主のいわれない慈悲のおかげで、だれもが、なんでも主から得ることができます。いっぽう至高の父親である主は、純粋な献愛者の奉仕を妨げになるようなものは授けません。主に奉仕をしている人々は、主の超越的な魅力によって、純粋な献愛奉仕をする境地に高められるのです。

第6節

नताः स्म ते नाथ सदाङ्घ्रिपङ्कजं
विरिञ्चवैरिञ्च्यसुरेन्द्रवन्दितम् ।
परायणं क्षेममिहेच्छतां परं
न यत्र कालः प्रभवेत् परः प्रभुः ॥ ६ ॥

ナターハ スマ テー ナータハ サダーングフリ・パンカジャンム
natāḥ sma te nātha sadāṅghri-pankajam

ヴィリンチャ・ヴァイリンチャ・スレーンドウラ・ヴァンディタンム
viriñca-vairiñcyā-surendra-vanditam

パラヤナンム クシェーマンム イヘーツチャターナム パランム
parāyaṇam kṣemam ihecchatām param

ナ ヤトウラ カーラハ プラバハヴェートウ パラハ プラブフ
na yatra kālah prabhavet paraḥ prabhuḥ

natāḥ—ひれ伏して; sma—私たちはそうした; te—あなたに; nātha—おお主よ; sadā—いつも; aṅghri-pankajam—蓮華の御足; viriñca—最初の生物、ブラフマー; vairiñcyā—サナカやサナータナのようなブラフマーの子たち; sura-indra—天上の王; vanditam—～に崇拜されて; parāyaṇam—至高者; kṣemam—幸福; iha—現世で; icchatām—そのように望む者; param—最高のもの; na—決してない; yatra—そこで; kālah—避けられない時の力; prabhavet—その影響力を行使することができる; paraḥ—超越的; prabhuḥ—至高主。

市民が言う。「おお主よ。あなたはブラフマーのような半神すべてに、4人のサナ(Sana)たちに、そして天上の王によってさえ崇拜されています。また、人生で最高の恩恵を心から求めている人々にとって究極の安らぎの方でもあります。あなたは至高の、超越的な主であり、避けられない「時」でさえ、あなたに影響を及ぼすことはできません」

要旨解説

至高主とは、『バガヴァッド・ギター』、『ブラフマ・サムヒター』、他の権威あるヴ

エーダ経典で確証されているように、シュリー・クリシュナのことです。だれも主より偉大か等しい者はいませんし、それがすべての経典の見解でもあります。時や空間の影響は、至高主の部分体であり、依存する立場にある生命体に及ぼされます。生命体は支配される側のブラフマン、いっぽう至高主は支配する側の絶対真理者です。この明白な事実を忘れてしまえば、すぐに幻想に囚われ、その結果として、漆黒の闇に閉じこめられるように三重の苦しみに陥れられます。認識する力を持つ生命体の明白な意識が神の意識であり、その意識を持つ魂はどのような状況でも主にひれ伏します。

第7節

भवाय नस्त्वं भव विश्वभावन
त्वमेव माताथ सुहृत्पतिः पिता ।
त्वं सद्गुरुर्नः परमं च दैवतं
यस्यानुवृत्त्या कृतिनो बभूविम ॥ ७ ॥

バハヴァーヤ ナス トウヴァンム バハヴァ ヴィシュヴァ・バハーヴァナ
bhavāya nas tvam bhava viśva-bhāvana

トウヴァンム エーヴァ マータータハ スフリトウ・パティヒ ピタ
tvam eva mātātha suhṛt-patiḥ pita

トウヴァンム サドウ・グルル ナハ パラマンム チャ ダイヴァタンム
tvam sad-gurur naḥ paramam ca daivatam

ヤッシュャヌヴリッテチャー クリティノー バブファーヴィマ
yasyānuvṛtṭyā kṛtino babhūvima

bhavāya—幸福のために; *naḥ*—私たちにとって; *tvam*—あなた; *bhava*—そうなる; *viśva-bhāvana*—宇宙の創造者; *tvam*—あなた; *eva*—確かに; *mātā*—母親; *atha*—もまた; *suhṛt*—幸福を願う者; *patiḥ*—夫; *pitā*—父親; *tvam*—あなた; *sat-guruḥ*—精神指導者; *naḥ*—私たちの; *paramam*—至高者; *ca*—そして; *daivatam*—崇拜できる神; *yasya*—～である者の; *anuvṛtṭyā*—その足跡に従うこと; *kṛtinaḥ*—成功して; *babhūvima*—私たちは～になる。

おお、宇宙の創造者よ。あなたは私たちの母親であり、幸福を願う方であり、主であり、父親であり、精神指導者であり、そして私たちの崇拜する神です。あなたの足跡に従うことで、私たちはなにをしても成功することができます。ですから、あなたの慈悲で私たちをいつまでも祝福してください。

要旨解説

あらゆる面で優れている人格主神は、宇宙の創造者であることから、優れた質をそなえる全生命体のために計画をたてます。善き生命体は主の善き助言に従うよう主に助言され、そして従うことで、生活のあらゆる面で成功することができます。主以外の神を崇拝する必要はありません。主はあらゆる力をそなえていますから、私たちが主の蓮華の御足に従順であることに主が満足すれば、物質・精神両方の生活を巧みにこなせるようあらゆる祝福を授けてくれます。人間の姿は、精神的境地を達成して神との永遠な絆を理解できる機会です。その絆は永遠です。途切れることも、壊れることもありません。忘れていた時期もあるでしょう、しかし、それも主の恩寵によってよみがえります。私たちが、あらゆる時代や場所で用意されている啓示經典の主の教えに従えば。

第8節

अहो सनाथा भवता स्म यद्वयं
त्रैविष्टपानामपि दूरदर्शनम् ।
प्रेमस्मितस्निग्धनिरीक्षणाननं
पश्येम रूपं तव सर्वसौभागम् ॥ ८ ॥

アホー サナータハー バハヴァター スマ ヤドウ ヴァヤナム
aho sanāthā bhavatā sma yad vayanm

トウライヴィシュタパーナナム アピ ドウーラ・ダルシャナンム
traiviṣṭapānām api dūra-darśanam

プレーマ・スミタ・スニグダハ・ニリークシャナーナナム
prema-smita-snigdha-nirīkṣaṇānanam

パッシエマ ルーバンム タヴァ サルヴァ・サウバハガム
paśyema rūpam tava sarva-saubhagam

aho—おお、これは私達の素晴らしい幸運である; *sa-nāthāḥ*—主人の保護下にあること; *bhavatā*—善きあなたによって; *sma*—私達になったように; *yad vayanm*—私達のように; *traiviṣṭa-pānām*—半神達の; *api*—もまた; *dūra-darśanam*—非常に希に見られる; *prema-smita*—愛情を込めて微笑んでいる; *snigdha*—愛情のこもった; *nirīkṣaṇa-ānanam*—その思いで見ている顔; *paśyema*—見よう; *rūpam*—美しさ; *tava*—あなたの; *sarva*—すべて; *saubhagam*—吉兆であること。

今日こうしてふたたびめぐりあい、私たちがあなたに守られるとはじつに幸運なことです。なぜなら、あなたは天国の住人たちを訪ねることさえほとんどないからです。いま私たちは、

愛情あふれるまなざしをたたえた笑顔を見ることができます。そして、あらゆる吉兆な印をたたえた崇高なお姿を見ることができます。

要旨解説

主の永遠の姿は、純粋な献愛者だけが見ることができます。主が非人格であるはずがありません。主は至高の絶対人格主神であり、献愛者だけが主と互に見つめあうことができ、またそれは高位の惑星にいる住人たちにできえません。ブラフマーや他の半神たちが、主クリシュナの完全分身である主ヴィシュヌの意見を求めるときは、白い地（シュヴェータドゥヴィーパ）に横たわる主ヴィシュヌがいる乳海の岸辺で待たなくてはなりません。この乳海とシュヴェータドゥヴィーパ惑星は、ヴァイクンタローカを物質界にそのまま移したものです。ブラフマージーやインドラのような半神たちできえ、このシュヴェータドゥヴィーパの領域に入ることができず、乳海の岸辺に立って、クシーローダカシャーイー・ヴィシュヌとも呼ばれる主ヴィシュヌに情報を伝えなくてはなりません。ですから、半神たちはほとんど主に会えることはないのですが、ドウヴァーラーカーの住人は、物質的活動とか経験哲学にもとづく推論などの穢れのない純粋な献愛者ですから、主の恩寵によって主と顔を見あわせることができます。これが生命体の本来の境地であり、献愛奉仕だけをとおして高まる自然で本来の生活を回復させることで達成できます。

第9節

यर्हाम्बुजाक्षपससार भो भवान्
कुरुन् मधून् वाथ सुहृदिदृक्षया ।
तत्राब्दकोटिप्रतिमः क्षणो भवेद्
रविं विनाक्षोरिव नस्तवाच्युत ॥ ९ ॥

ヤルヒ アンムブジャークシャーパササーラ ボホー バハヴァーン
yarhy ambujākṣāpasasāra bho bhavān

クルーン マドゥーン ヴァータハ スフリドゥ・ディドゥリクシャヤー
kurūn madhūn vātha suhṛd-didṛkṣayā

タトゥラーブダ・コーティ・プラティマハ クシャノー バハヴェドゥ
tatrābda-koṭi-pratimaḥ kṣaṇo bhaved

ラヴィンム ヴィナークシュノール イヴァ ナス タヴァーチュタ
raviṁ vinākṣnor iva nas tavācyuta

yarhi—～の時はいつでも; ambuja-akṣa—蓮華の目を持つ方よ; apasasāra—あなたが行ってしまわれる; bho—おお; bhavān—あなたご自身; kurūn—クル王の子孫; madhūn—マ

トゥラー（ヴラジャブーミ）の住民たち; *vā*—どちらも; *atha*—ゆえに; *suhṛt-didṛkṣayā*—彼らに会うために; *tatra*—その時; *abda-koti*—数百万年; *pratimaḥ*—のように; *kṣaṇaḥ*—瞬間; *bhavet*—～になる; *ravim*—太陽; *vinā*—～なしで; *akṣṇoḥ*—目の; *iva*—そのようなもの; *naḥ*—私たちの; *tava*—あなたの; *acyuta*—おお、完全無欠なお方よ。

おお、蓮華の目を持つお方よ。あなたが友人や親族に会うためにマトゥラーやヴリンダーヴァンに出立されたあとの歳月の一瞬一瞬が、私たちには百万年も過ぎさったかのように感じられます。完全無欠なお方よ。そのときの私たちの目は、太陽を失ったかのように、まったく意味のないものとなるのです。

要旨解説

私たちは、神の存在を肉体の感覚で知覚できると思いがっています。しかし、感覚そのものが絶対的ではないことを忘れてしています。ある条件下だけでしか機能しないのです。たとえば目。私たちの目は、太陽が出ていればある程度機能します。しかしその光線がなくなったときにはまったく役に立ちません。主シュリー・クリシュナは根源の主、至高の真理者ですから、太陽に比較されています。主がいなければ、私たちの知識はどれも偽物か、あるいは部分的知識でしかありません。太陽の反対が暗闇であるように、クリシュナの反対はマヤー・幻想です。主の献愛者は、主クリシュナから出ている光のおかげですべてを正しい視点で見ることができます。主の恩寵で、純粋な献愛者は無知の暗闇に入ることはありません。ですから、私たちはいつも主クリシュナに見つめられていなくてはなりませんし、そのことで、主のさまざまな力をとおして自分と主を見ることができます。太陽がなければなにも見えないように、主の存在を知らなければなにも見ることはできません。主を忘れてしまえば、どのような知識も幻想に包まれています。

第10節

कथं वयं नाथ चिरोषिते त्वयि प्रसन्नदृष्ट्याखिलतापशोषणम् ।
जीवेम ते सुन्दरहासशोभितमपश्यमाना वदनं मनोहरम् ।
इति चोदीरिता वाचः प्रजानां भक्तवत्सलः ।
शृण्वानोऽनुग्रहं दृष्ट्या वितन्वन् प्राविशत् पुरम् ॥ १० ॥

カタハナム ヴァヤナム ナータハ チローシテ トウヴァイ
katham vayan nātha ciroṣite tvayi

プラサンナ・ドゥリシュテヤーキヒラ・ターパ・ショーシャナム
prasanna-dṛṣṭyākṣhila-tāpa-śoṣaṇam

ジーヴェーマ テー スンダラ・ハーサ・ショービヒタンム
jīvema te sundara-hāsa-śobhitam

アパッシャマーナー ヴァダナンム マノーハラナム
apaśyamānā vadanam manoharam

イティ チョーディーリター ヴァーチャハ
iti codīritā vācaḥ

プラジャーナーナム バハクタ・ヴァトウサラハ
prajānām bhakta-vatsalaḥ

シュリンヴァーノー ヌグラハンム ドウリシュテチャー
śṛṅvāno 'nugraham dṛṣṭyā

ヴィタンヴァン プラーヴィシャトウ プランム
vitanvan prāviśat puram

katham—どのように; *vayam*—私たち; *nātha*—おお、主よ; *ciroṣite*—ほとんどいつも外国にいて; *tvayi*—あなたによって; *prasanna*—満足; *dṛṣṭyā*—そのまなざしによって; *akhila*—普遍的な; *tāpa*—苦しみ; *śoṣaṇam*—克服すること; *jīvema*—生き続けられるだろうか; *te*—あなたの; *sundara*—美しい; *hāsa*—微笑み; *śobhitam*—飾られて; *apaśyamānāḥ*—見ることなく; *vadanam*—顔; *manoharam*—魅力的な; *iti*—こうして; *ca*—そして; *udīritāḥ*—話している; *vācaḥ*—言葉; *prajānām*—市民たちの; *bhakta-vatsalaḥ*—献愛者に優しい; *śṛṅvānaḥ*—このように知り; *anugraham*—優しさ; *dṛṣṭyā*—まなざしによって; *vitanvan*—分けあたえている; *prāviśat*—入った; *puram*—ドゥヴァーラカープリー。

「主よ。あなたがいつも国の外にいらっしゃるなら、私たちは、あらゆる苦しみを打ち消すその美しいお顔を見ることができません。あなたなしで、どうして生きていけましょう」

臣民や献愛者に優しい主は、献愛者たちの話を聞いたあとドゥヴァーラカーの都に入り、こぞって歓迎するかれらに感謝し、超越的なまなざしをそそいだ。

要旨解説

主クリシュナの魅力には強い力があり、ひとたび主に魅了されれば、主と離れていることに耐えられなくなります。なぜでしょうか。それは、太陽の光と太陽が永遠に不可分の関係にあるように、私たちも主と永遠な絆を持っているからです。太陽光線は、太陽から放射される粒子で構成されています。そのため、太陽光線と太陽は切っても切れない関係にあります。その間に雲が入って視界が閉ざされても、それは一時的で見かけの現象にすぎません。雲がなくなれば、光線は太陽から放たれる本来の輝きを取りもどします。同じように、生命

体は全体の魂の小さな部分であり、幻想の力・マーヤーによって主から離れた状態にあります。この幻想の力、つまりマーヤーのカーテンはどうしても取りのぞかなくてはなりませんし、それができれば苦しみはすぐに消えてなくなります。だれでも人生の苦しみを取りのぞきたいと願っているのですが、その方法がわかりません。その答がこの節にあります。またそれは、その方法が理解できるかどうかにかかっています。

第 1 1 節

मधुभोजदशार्हकुकुरान्धकवृष्णिभिः ।
आत्मतुल्यबलैर्गुप्तां नागैर्भोगवतीमिव ॥ ११ ॥

マドフウ・ボホージャ・ダシャールハールハ
madhu-bhoja-dasārharha-

ククランダハカ・ヴリシュニビヒ
kukurāndhaka-vṛṣṇibhiḥ

アートウマ・トゥリヤ・バライル グプターンム
ātma-tulya-balair guptām

ナーガイル ボホーガヴァティーンム イヴァ
nāgair bhogavatīm iva

madhu—マドウ; *bhoja*—ボージャ; *dasārha*—ダシャールハ; *arha*—アルハ; *kukura*—ククラ; *andhaka*—アンダカ; *vṛṣṇibhiḥ*—ヴリシュニの子孫によって; *ātma-tulya*—主と同じほど; *balaiḥ*—力で; *guptām*—守られて; *nāgaiḥ*—ナーガたちによって; *bhogavatīm*—ナーガローカの首都; *iva*—~のように。

ナーガローカの首都ボホーガヴァティーンがナーガたちに守られているように、ドウヴァーラカーも、ボージャ、マドウ、シャサールハ、アルハ、ククラ、アンダカなど、主クリシュナに匹敵する力を持つヴリシュニの子孫によって守られている。

要旨解説

ナーガローカ惑星は地球よりも下位にあり、そこに太陽の光が届いていない、と言われていいます。しかしその暗闇は、ナーガ（天上の蛇）たちの頭部にある宝石の光によって取りのぞかれ、その惑星には、ナーガたちを楽しませる美しい庭や川が流れている、とも表現されています。この節でも、その場所は住民たちによって完全に守られている、と書かれています。同じようにドウヴァーラカーの都も、主が地上で自らの力を発揮するかぎり、主に匹敵する力を持つヴリシュニの子孫によって堅固に守られています。

第 1 2 節

सर्वर्तुसर्वविभवपुण्यवृक्षलताश्रमैः ।
उद्यानोपवनारामैर्वृतपद्माकरश्रियम् ॥ १२ ॥

サルヴァルトウ・サルヴァ・ヴィバハヴァ・
sarvartu-sarva-vibhava-

プニャ・ヴリクシャ・ラターシュラマイヒ
punya-vṛkṣa-latāśramaiḥ

ウデヤーノーパヴァナーラーマイル
udyānopavanārāmair

ヴリタ・パドゥマーカーラ・シュリヤム
vṛta-padmākara-śriyam

sarva—すべての; *ṛtu*—季節; *sarva*—すべての; *vibhava*—富; *punya*—敬虔な; *vṛkṣa*—木; *latā*—蔓; *āśramaiḥ*—庵で; *udyāna*—果樹園; *upavana*—花園; *ārāmaiḥ*—遊園地や美しい公園; *vṛta*—～に囲まれて; *padma-ākara*—蓮華の花が咲く場所、あるいは心地よい水源地; *śriyam*—美しさを増している。

ドウヴァーラーカーの都は、季節をつうじて富に満ちあふれている。あずまや、果樹園、花園、公園、蓮華の花が咲きみだれる池が随所に作られている。

要旨解説

人類の文化は、自然からの贈り物を正しく使うことで完成します。この節で説明されているように、ドウヴァーラーカーは、蓮華の花が咲きほこる池をたたえた花園や果樹園などに囲まれています。現代の都市には欠かせない、そして屠殺場でささえられているような工場や施設の説明はありません。自然界の贈り物を活用する傾向は、現代文化人の心にも残っています。現代の指導者たちは、自然が豊かに残る庭園や池などを配置したところに自分たちの居住をかまえています。公園も庭園もないような住宅密集地に一般の人たちを住まわせています。もちろん、この節にはそのような環境とは異なるドウヴァーラーカーの描写があり、この居住区・ダーマ (*dhāma*) は、蓮華の花が咲く池を配した庭園や公園に囲まれていることがわかります。またすべての人が、自然界の贈り物であるくだものや花の恵みにあずかり、不潔な家や貧民街を作りだす工場や製造施設もなかったことがわかります。文化の発達には、繊細な感性を失わせる加工場や生産施設で決まるのではなく、堅固な精神的本質を高め、神のもとに帰る機会を提供できるかどうかで決まります。工場施設の発達はウグラ・カルマ (*ugra-karma*) という劣悪な労働でささえられ、そのような活動は人間の繊細

な感性を衰えさせ、劣悪な人間の住む迷宮を作る社会の原因になります。

また、季節をつうじて花やくだものを実らせる敬虔な木々についても述べられています。質の劣る木々は密林だけに生えているもので、燃料に使われます。いまでは、そのような木が道路沿いに植えられています。人間にそなわった力は、人生の問題を解決する精神的理解を提供する繊細な感覚を高めるために正しく使われなくてはなりません。くだもの、花、美しい庭園、公園、そして蓮華の花が咲きみだれるなかをアヒルや白鳥が泳ぎまわる池、十分な牛乳やバターを供給してくれる牛などは、人体の繊細な細胞を高めるために欠かせません。これらの要素に反する加工場や製造工場や作業場といった迷宮は、働く人々の心に邪悪な気質を作りだします。受益団体は働く人々を犠牲にして繁栄し、その結果として労使のあいだでさまざまな形で衝突が起こります。ドゥヴァーラカー・ダーマの説明は、人間文化の理想的な境地をしめしています。

第 1 3 節

गोपुरद्वारमार्गेषु कृतकौतुकतोरणाम् ।
चित्रध्वजपताकाग्रैरन्तः प्रतिहतातपाम् ॥ १३ ॥

ゴープラ・ドゥヴァーラ・マールゲーシュ
gopura-dvāra-mārgeṣu

クリタ・カウトウカ・トーラナーンム
kṛta-kautuka-toraṇām

チトゥラ・ドゥヴァジャ・バターカーグライル
citra-dhvaja-patākāgrair

アンタハ プラティハタータパーンム
antaḥ pratihatātāpām

gopura—都の入り口; *dvāra*—扉; *mārgeṣu*—さまざまな道路上に; *kṛta*—取り付けられて; *kautuka*—祭典のために; *toraṇām*—飾られたアーチ門; *citra*—塗られて; *dhvaja*—旗; *patākā-agraih*—主要な印によって; *antaḥ*—～の中に; *pratihata*—さえぎって; *ātāpām*—太陽の光。

都の入り口、道路沿いの各家屋の扉、花づなのアーチ門は、主を歓迎するために、プランタンの木やマンゴーの葉といった祝賀の植物で見事に飾られている。旗、花輪、絵や言葉が描かれた看板などがそこかしこに日陰を作っている。

要旨解説

特別の祭典を飾る印として、プランタンの木、マンゴーの木、くだもの、花など、自然界

の贈り物が使われます。マンゴーの木、ヤシの木、プランタンの木はいまでも縁起のいい植物と考えられています。この節に述べられている旗には、主の偉大なふたりの召使いであるガルダやハヌマーンが描かれています。献愛者はそのような絵画や装飾をいまでも崇敬しており、主の召使いは、主を満足させるために敬意が払われます。

第 1 4 節

सम्मार्जितमहामार्गरथ्यापणकचत्वराम् ।
सिक्तां गन्धजलैरुसां फलपुष्पाक्षताङ्कुरैः ॥ १४ ॥

サンムマールジタ・マハー・マールガ・
sammārjita-mahā-mārga-

ラチャーパナカ・チャトウヴァラーナム
rathyāpaṇaka-catvarām

シクターンム ガンダハ・ジャライル ウプターンム
siktām gandha-jalair uptām

パハラ・プシュパークシャターンクライヒ
phala-puṣpākṣatāṅkuraiḥ

sammārjita—徹底的に清掃されて; *mahā-mārga*—幹線道路; *rathya*—路地や地下道; *āpaṇaka*—買い物市場; *catvarām*—集会場; *siktām*—〜で濡らされて; *gandha-jalaiḥ*—香りをつけた水; *uptām*—〜で撒かれた; *phala*—くだもの; *puṣpa*—花; *akṣata*—壊れていない; *aṅkuraiḥ*—種。

幹線道路、地下道、路地、市場、集会場は余すところなく清掃され、香り高い水が打たれていた。そして主を歓迎するために、くだもの、花、形のいい種がそこかしこに撒かれていた。

要旨解説

バラやケオラといった花を蒸留して作られた香水は、ドウヴァーラカー・ダーマの幹線道路、舗道、路地を濡らすために使われました。また市場や集会場もちりひとつなく掃き清められました。この節の説明から、ドウヴァーラカー・ダーマは、多くの幹線道路、道路、公園、貯水池、集会場などで整備された大都市で、あらゆる場所が花やくだもので飾られていたことがわかります。そして主を歓迎するために、そのような花やくだもの、きれいな種などが公共の場所に撒きちらされていました。形の壊れていない幼苗（ようびょう）期の穀物やくだものはひじょうに縁起のいいものとされ、いまでもヒन्दウー社会ではよく祭典の日に使われています。

第 15 節

द्वारि द्वारि गृहाणां च दध्यक्षतफलेक्षुभिः ।
अलङ्कृतां पूर्णकुम्भैर्बलिभिर्धूपदीपकैः ॥ १५ ॥

ドゥヴァーリ ドゥヴァーリ グリハーナーンム チャ
dvāri dvāri grhāṇām ca

ダディ・アクシャタ・パハレークシュビヒ
dadhi-akṣata-phalekṣubhiḥ

アランクリターンム プールナ・クムバハイル
alaṅkṛtām pūrṇa-kumbhair

バリビヒル ドフーパー・ディーパカイヒ
balibhir dhūpa-dīpakaiḥ

dvāri dvāri—各家屋の扉; *grhāṇām*—すべての居住家屋の; *ca*—そして; *dadhi*—凝乳;
akṣata—壊れていない; *phala*—くだもの; *ikṣubhiḥ*—サトウキビ; *alaṅkṛtām*—飾られて;
pūrṇa-kumbhair—満杯の水差し; *balibhiḥ*—崇拜のための道具と共に; *dhūpa*—お香;
dīpakaiḥ—ランプとろうそく。

各住宅の扉のまえには、凝乳、形のよいくだもの、サトウキビ、崇拜用の満杯の水差し、
お香やろうそくといった吉兆な品々が置かれていた。

要旨解説

ヴェーダの儀式にのっとりた歓待の方法は、形式的なものでは決してありません。歓迎は、
上記のように道路をただ飾るだけではなく、インセンス、ランプ、花、お菓子、くだものな
ど、自分の能力に応じて主を崇拝することでなされていました。すべてが主に捧げられ、そ
の食べ物の残りは、集まった市民たちのあいだで分けられました。現代に見られるような味
気ない歓迎ではなかったのです。どの家も同じ方法で主を迎える準備ができており、こうし
て道路沿いの家に住む人々もそのような食べ物の残りを市民たちと分かちあい、そのことで
祭典は滞りなく終わります。食べ物を配ってこそ儀式が完全になるのであり、またそれがヴェ
ーダ文化です。

第 16 - 17 節

निशम्य प्रेष्ठमायान्तं वसुदेवो महामनाः ।
अक्रूरश्चोग्रसेनश्च रामश्चाद्भुतविक्रमः ॥ १६ ॥
प्रद्युम्नश्चारुदेष्णश्च साम्बो जाम्बवतीसुतः ।
प्रहर्षवेगोच्छशितशयनासनभोजनाः ॥ १७ ॥

ニシャミヤ プレーシュタハンム アーヤーンタンム
niśamya preṣṭham āyāntam

ヴァスデーヴォー マハー・マナーハ
vasudevo mahā-manāḥ

アクルーラシュ チョーグラセーナシュ チャ
akrūraś cograsenaś ca

ラーマシュ チャードウブタ・ヴィクラマハ
rāmaś cādbhuta-vikramaḥ

プラデュムナシュ チャールデーシュナシュ チャ
pradyumnaś cārudeṣṇaś ca

サーンボー ジャーンバヴァティー・スタハ
sāmbho jāmbavatī-sutaḥ

ブラハルシャ・ヴェーゴッチャシタ・
praharṣa-vegocchaśita-

シャヤナーサナ・ボホージャナーハ
śayanāsana-bhojanāḥ

niśamya—聞くことだけで; *preṣṭham*—もっとも愛しい方; *āyāntam*—帰ってくること; *vasudevaḥ*—ヴァスデーヴァ (クリシュナの父); *mahā-manāḥ*—寛大な人物; *akrūraḥ*—アクルーラ; *ca*—そして; *ugrasenaḥ*—ウグラセーナ; *ca*—そして; *rāmaḥ*—バララーマ (クリシュナの兄); *ca*—そして; *adbhuta*—超人間; *vikramaḥ*—力; *pradyumnaḥ*—プラデュムナ; *cārudeṣṇaḥ*—チャールデーシュナ; *ca*—そして; *sāmbaḥ*—サーンバ; *jāmbavatī-sutaḥ*—ジャーンバヴァティーの子; *praharṣa*—この上ない幸福; *vega*—力; *ucchaśita*—〜に影響されて; *śayana*—横たわること; *āsana*—座ること; *bhojanāḥ*—食事をする事。

だれよりも愛しいクリシュナがドウヴァーラカーダーマに近づいていることを聞いたヴァスデーヴァ、アクルーラ、ウグラセーナ、バララーマ (超人的な力を持つ方)、プラデュムナ、チャールデーシュナ、ジャーンバヴァティーの子・サーンバなど、だれもが幸せに沸きたち、横たわること、座ることも、食べることもやめた。

要旨解説

Vasudeva: ヴァスデーヴァ (*Vasudeva*) シューラセーナ王の子息。デーヴァキーの夫、主シュリー・クリシュナの父。クンティーの兄、スバドゥラーの父。スバドゥラーはいとこのアルジュナと結婚しています。この慣習はインドの一部でもまだ残っています。ヴァスデーヴァはウグラセーナ王に任命された大臣で、のちにウグラセーナの兄弟デーヴァカの8人の娘たちと結婚しました。デーヴァキーはそのなかのひとりです。カムサはヴァスデーヴァ

の義理の兄弟にあたりますが、デーヴァキーの8番目の子をカムサに引きわたすことで互いに同意し、そして投獄されました。しかしこれは、クリシュナの計画にもとづいて実現していません。また、パーンダヴァ兄弟の母方の叔父だったことから、パーンダヴァ兄弟の浄化儀式に積極的に参加しています。僧侶カッシャパをシャタスリンガ・パルヴァタに呼び、その儀式を執行しました。主クリシュナはカムサの牢獄のなかに現われましたが、ヴァスデーヴァの手で、ゴークラに住むクリシュナの育ての親となるナンダ・マハーラージャの家に移されました。クリシュナはバラデーヴァとともに、ヴァスデーヴァが他界するまえにこの世界から去っていましたが、アルジュナ（ヴァスデーヴァの甥）が、ヴァスデーヴァの他界後にその葬式を執行しています。

アクルーラ (Akrūra) ヴリシュニ王家の最高指揮官で、主クリシュナの偉大な献愛者。アクルーラは「祈りを捧げる」というたったひとつの献愛奉仕をして成功の境地に達しました。アプーカの娘のスータニーの夫でした。アルジュナがクリシュナの意志にしたがってスバドゥラーを奪うときに、アルジュナを支持しました。クリシュナとアクルーラは、アルジュナがスバドゥラーを無事に連れさったとき、アルジュナに会いにいます。また二人は、この出来事のあとにアルジュナに贈り物をしました。アクルーラは、スバドゥラーの子であるアビマニュがウッターラ（マハーラージャ・パリークシットの母）と結婚したときに居合わせました。アクルーラは、義理の父であるアプーカとは折りあいが悪かったのですが、ふたりとも主の献愛者でした。

ウグラセーナ (Ugrasena) ヴリシュニ王家の強大な王の一人で、マハーラージャ・クンティボージャのいここにあたります。別名をアプーカといいます。ウグラセーナに仕える大臣がヴァスデーヴァで、強大なカムサはかれの子息です。このカムサが父親を投獄し、自分がマトゥラーの王座に就きました。主クリシュナと兄の主バラデーヴァの恩寵でカムサは殺され、ウグラセーナはふたたび王座に就くことができました。シャルヴァがドゥヴァーラカーを攻撃したときに勇敢に戦い、敵を撃退させました。また主クリシュナの神性についてナーラダジーに問いかけています。ヤドゥ王家が滅亡する運命にあったとき、ウグラセーナはサーンバの体内から作られた鉄の塊の処理をまかされました。その塊を砕いて細かくし、糊状にし、ドゥヴァーラカーの海岸の水と混ぜ合わせました。このあと、ドゥヴァーラカーの都と王国では完全に飲酒を禁じました。死後、解脱の境地に達しています。

バラデーヴァ (Baladeva) ヴァスデーヴァとローヒニーのあいだに誕生した神聖な子息です。ローヒニーの愛する子、すなわちローヒニー・ナンダナという名前でも知られています。ヴァスデーヴァがカムサとの約束どおり投獄されたとき、母親ローヒニーとともにナンダ・マハーラージャのもとに預けられました。つまりナンダ・マハーラージャは、主クリシュナ同様、バラデーヴァの育ての父親です。主クリシュナと主バラデーヴァは異母兄弟ではありましたが、幼いころからいつもいっしょに暮らしてきました。主バラデーヴァは最高

人格主神の完全分身であり、ですから、主クリシュナと同じ力をそなえています。ヴィシュヌ・タットヴァ（神の範疇）にぞくします。ドウラウパディーのスヴァヤンヴァラ儀式にシュリー・クリシュナといっしょに参加しました。シュリー・クリシュナの綿密な計画のもとでスバドゥラーがアルジュナに連れさられたとき、バラデーヴァはアルジュナに怒り、すぐに殺そうとしました。シュリー・クリシュナは親友のために、主バラデーヴァの足元にひれふし、怒りをおさえるようなだめました。シュリー・バラデーヴァはこうして満足しました。またあるとき、カウラヴァたちに怒り、かれらの住む都市をヤムナー川の底深く沈めようとしてしました。カウラヴァたちは、主バラデーヴァの蓮華の御足に服従することで主を満足させました。じつは主クリシュナの誕生のまえの第7番目の子ですが、主の意志で、カムサの怒りから逃れるためにローヒニーの胎内に移されたのでした。そのため、シュリー・バラデーヴァの完全分身であるサンカルシャナという別名ももっています。主クリシュナと同じ力を持ち、献愛者に精神的力を授けられることからバラデーヴァとして知られています。ヴェーダのなかでも、バラデーヴァの恩寵をさずからなければ至高主を知ることはできない、と説かれています。バラ（bala）は精神的な力のことであり、肉体の力を指しているわけではありません。肉体の力で精神的な悟りは得られません。肉体の力はその体の終わりとともになくなります。精神的力は精神魂とともに次の生にまで受けつがれますから、バラデーヴァからさずかった力は決してなくなりません。その力は永遠であるため、バラデーヴァはすべての献愛者にとって根源の精神指導者とされています。

シュリー・バラデーヴァは、主シュリー・クリシュナとサーンディーパニ・ムニの学校で学友としてともに学びました。子どものころ、シュリー・クリシュナといっしょに多くのアスラを殺しましたが、とくにターラヴァナの森でデーヌカアスラを殺した話がよく知られています。クルクシェートラの戦いでは中立の立場を貫きとおしましたが、戦争にならないよう最善もつくしています。ドゥリヨーダナの味方だったのですが、中立の立場を変えませんでした。ドゥリヨーダナとビーマセーナが戦闘棒で戦ったときには、その様子を見つめていました。しかし、ビーマがドゥリヨーダナのベルトの下の太腿を攻撃したことから、その邪道の戦いの報復をしようとしてしました。そこで主シュリー・クリシュナは、バラデーヴァの怒りからビーマを救いました。しかし主バラデーヴァはビーマセーナに幻滅し、すぐにその場所から立ちさり、その直後にドゥリヨーダナは倒れ、絶命しました。アルジュナの子のアビマニュの葬式は主バラデーヴァによって執行されました。母方の叔父だったからです。パーンダヴァ兄弟たちは、あまりの悲しみに、だれひとりとしてその葬式を執行することができませんでした。主が物質界を去るとき、自分の口から白い大蛇を出し、こうしてシェーシャナーガという蛇によって運ばれていきました。

プラデュムナ（Pradyumna）　カーマデーヴァの化身、またある見解ではサナトウ・クマラーの化身で、人格主神主シュリー・クリシュナと、ドウヴァーラカーの主要な女王ラク

シュミーデーヴィー・シュリーマティー・ルクミニのあいだに生まれた子とされています。アルジュナがスバドゥラーと結婚したときに祝福しに行ったひとりです。またシャルヴァと戦った大將軍のひとりでしたが、戦闘中に失神します。御者がかれを野营地まで運びましたが、プラデムナはその行為を叱責しました。しかし結局、シャルヴァとふたたび戦って勝利をおさめました。ナーラダジーからさまざまな半神について話を聞いたことがあります。また主シュリー・クリシュナの4人の完全拡張体のひとりで、三番目にあたります。父親であるシュリー・クリシュナにブラーフマナの栄光について尋ねたこともあります。ヤドゥ家の兄弟同士で戦ったとき、ヴリシュニ家の王のひとりボージャの手で殺害されました。死後、自分本来の姿にもどっていきました。

チャールデーシュナ (Cārudeṣṇa) シュリー・クリシュナとルクミニデーヴィーのもうひとりの子息。ドゥラウパディーのスヴァヤンヴァラ儀式のときに参列しました。兄弟や父親同様、偉大な戦士で、ヴィニニダカと戦って殺しました。

サーンバ (Sāmba) ヤドゥ王家の偉大な英雄のひとりで、主シュリー・クリシュナとその妻ジャンバヴァティーのあいだに生まれました。矢を射る技術をアルジュナから学び、マハーラージ・ユディシュティラの時代の議会に参加しました。マハーラージ・ユディシュティラのラージャスーヤ・ヤギヤにも参加しています。ヴリシュニ家の人々がプラバーサ・ヤギヤに参加したとき、サーンバの誉れ高い行動が主バラデーヴァのまえでサーチャキによって語られました。マハーラージ・ユディシュティラがおこなったアシュヴァメーダ・ヤギヤのときに、父親である主シュリー・クリシュナと参加しました。あるとき、リシたちのまえで、兄弟たちにまじって妊婦のふりをし、冗談のつもりで、どんな子が生まれるか当ててみるよう聞きました。リシたちは、「鉄の塊が生まれる、それがヤドゥ家の兄弟間の争いの原因になる」と予言しました。翌朝、サーンバは鉄の塊を産み落とし、その塊の処理ウグラセーナにまかされました。じつは、その兄弟間の争いは予言されており、サーンバはその争いで死んでいます。

この主クリシュナの子息たちが、高尚な父親を迎えるために、横たわっていたり、座っていたり、食事をしていたりしていましたが、すべてを投げだして、宮殿を飛びだしていきました。

第18節

वारणेन्द्रं पुरस्कृत्य ब्राह्मणैः ससुम्राणैः ।
शङ्खतूर्यनिनादेन ब्रह्मघोषेण चादृताः ।
प्रत्युञ्जग्मू रथैर्हृष्टाः प्रणयागतसाध्वसाः ॥ १८ ॥

ヴァーラネンドウランム プラスクリテヤ
vāraṇendram puraskṛtya

ブラーフマナイヒ サスマンガライヒ
brāhmaṇaiḥ sasumaṅgalaiḥ

シャンカハ・トウーリヤ・ニナーデーナ
śaṅkha-tūrya-ninādena

ブラフマ・ゴホーシェーナ チャードウリターハ
brahma-ghoṣeṇa cāḍṛtāḥ

プラテュッジャグムー ラタハイル フリシュターハ
pratyujjagmū rathair hr̥ṣṭāḥ

プラナヤーガタ・サードフウヴァサーハ
praṇayāgata-sādhvasāḥ

vāraṇa-īndram—吉兆な使命を持つ象たち; *puraskṛtya*—前面に置いて; *brāhmaṇaiḥ*—ブラーフマナたちによって; *sa-sumaṅgalaiḥ*—吉兆なすべての印で; *śaṅkha*—法螺貝; *tūrya*—ラツパ; *ninādena*—～の音で; *brahma-ghoṣeṇa*—ヴェーダの聖歌を唱えることで; *ca*—そして; *cāḍṛtāḥ*—讃えた; *prati*—～に向かつて; *ujjagmuḥ*—急いで進んだ; *rathaiḥ*—馬車で; *hr̥ṣṭāḥ*—歓喜の中で; *praṇayāgata*—愛情に満たされて; *sādhvasāḥ*—あらゆる敬意をこめて。

かれらは、花を手にしたブラーフマナたちと馬車に乗り、主をめざして駆けつけた。そのまえには幸運の象徴である象たちが進み、法螺貝やラツパが吹きならされ、ヴェーダ聖歌が唱えられた。こうして、愛情をこめた敬意をしめしたのである。

要旨解説

偉大な人物を迎えるヴェーダ式の歓迎は、その人物のために愛情と尊敬をこめた雰囲気をかもしだすことにあります。そのような吉兆な歓迎の雰囲気をかもしだす道具についてこの節が述べており、そのなかには法螺貝、花、お香、飾られた象、そしてヴェーダ経典の節を唱える正しいブラーフマナたちが含まれています。そのような歓迎の儀式には、迎える者と迎えられる者の十分な誠実がこめられています。

第 19 節

वारमुख्याश्च शतशो यानैस्तद्दर्शनोत्सुकाः ।

लसत्कुण्डलनिर्भातकपोलवदनश्रियः ॥ १९ ॥

ヴァーラムキハーシュ チャ シャタショー
vāramukhyāś ca śataśo

ヤーナイス タドウ・ダルシャノートウスカーハ
yānais tad-darśanotsukāḥ

ラサトウ・クンダラ・ニルバハータ・
lasat-kuṇḍala-nirbhāta-

カポーラ・ヴァダナ・シュリヤハ
kapola-vadana-śriyaḥ

vāramukhyāḥ—名高い娼婦たち; *ca*—そして; *śataśaḥ*—数百人の～; *yānaiḥ*—乗り物に乗って; *tat-darśana*—主シュリー・クリシュナに会うために; *utsukāḥ*—強く切望して; *lasat*—かかっている; *kuṇḍala*—耳飾り; *nirbhāta*—まばゆい; *kapola*—額; *vadana*—顔; *śriyaḥ*—美しさ。

同時に、数多くの名高い娼婦たちもさまざまな乗り物に揺られて道路を進んだ。主に会いたい一心でやってきたかのじょたちの美しい顔はきらめく耳飾りで彩られ、その額の美しさをきわだたせている。

要旨解説

娼婦であっても、主の献愛者であれば嫌悪する必要はありません。つい最近まで、インドの大都市には主の誠実な献愛者でもある娼婦が多くいました。運命のいたずらで、社会的にさげすまれるような仕事をしなくてはならないことがあります。それが献愛奉仕の妨げにはなるわけではありません。献愛奉仕はどのような状況でも妨げられることはありません。この節から、約5,000年昔の当時でさえ、主クリシュナの住むドウヴァーカーのような都市にも娼婦たちがいたことがわかります。これは、社会を適切に維持させるためにも娼婦の存在が必要だったことを物語っています。政府は飲酒できる施設を用意しますが、だからといって飲酒を奨励しているわけではありません。要点は、どうしても酒を飲みたいと思う人たちがいるということであり、大都市で禁酒法を制定してしまえば、酒の密売を助長する結果になることは知られた事実です。同じように、家庭で満たされない男性たちにはしかるべき便宜も必要であり、もし娼婦がいなければ、低い意識を持つ男性たちが他の人々を売春にかりたてることとなります。ですから、公に娼婦との関係を持つことができれば、社会の尊厳は維持されます。売春が助長されるような社会になるよりは、売春を職業とした環境があるほうが望ましいといえます。真の矯正とは人々をして主の献愛者になるよう啓蒙することであり、その結果、暮らしを墮落させる要素を抑制することができます。

ヴィシュヌ・スヴァーミーのヴァイシュナヴァ派に属するシュリー・ビルヴァマンガラ・タークラという偉大なアーチャーリヤは、世帯者として暮らしていたとき、主の献愛者のチ

ンターマニという娼婦にすっかり心を奪われていました。ある夜タークラは、どしゃぶりの雨と雷のなか、チンターマニの家を訪ねましたが、かのじよはそのような恐ろしい夜に、タークラが怒濤逆巻く川を渡って来たことに仰天しました。そして、自分のようなつまらない人間の肉や骨に心を奪われるのではなく、主の超越的な美しさの魅力を得るために献愛奉仕に正しく活用できるはず、とタークラ・ビルヴァマンガラを戒めました。その娼婦の言葉はタークラの人生を一転させ、やがて精神的悟りの道を歩きはじめました。のちにタークラはその娼婦を精神指導者として受け入れ、書き残した文献のなかで、自分に正しい道をしめしてくれたチンターマニという名前を幾度か讃えています。

『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第32節）で主は言っています。「プリターの子よ。卑しいチャンダーラ（チンターマニ）の家庭に生まれても、あるいは不信心者の家庭に生まれても、さらに娼婦であっても、わたしへの無垢な献愛奉仕に身をゆだねれば、人生の完成に到達できる。献愛奉仕の道には、卑しい誕生や職業による障害などまったくないからである。その道は、従う気持ちのある者には、大きく開かれている」

ドゥヴァーラカーの娼婦たちは、主に会いたくてたまらず、また全員無垢な献愛者だからこそ、『バガヴァッド・ギーター』のこの言葉のように、解脱の道を進んでいることがわかります。ですから、社会に必要な唯一の矯正は、市民を主の献愛者に変える組織だった努力が必要だということであり、そうすることで天国の住人の質のすべてがかれらの内に培われる、ということです。いっぽう、献愛者でない者たちには、どれほど物質的に高められていても優れた質はまったくありません。その違いは、主の献愛者は解脱の道を歩き、そして非献愛者は物質的束縛につながる道をさらに進んでいく、ということです。文化の発達の基準は、人々が正しく教化されているか、そして解脱の道を歩いているか、という点にあります。

第20節

नटनर्तकगन्धर्वाः सूतमागधवन्दिनः ।
गायन्ति चोत्तमश्लोकचरितान्यद्भुतानि च ॥ २० ॥

ナタ・ナルタカ・ガンダハルヴァーハ
naṭa-nartaka-gandharvāḥ

スータ・マーガダハ・ヴァンディナハ
sūta-māgadha-vandinaḥ

ガーヤンティ チョーッタマシュローカ・
gāyanti cottamaśloka-

チャリターニ アドゥブフターニ チャ
caritāny adbhutāni ca

naṭa—劇作家; nartaka—踊り手; gandharvāḥ—絶妙な歌手; sūta—歴史学者;
māgadha—系図学者; vandinaḥ—博識な吟唱家; gāyanti—唱える; ca—それぞれ;
uttamaśloka—至高主; caritāni—活動; adbhutāni—どれも超人的である; ca—そして。

優れた劇作家、芸術家、踊り手、歌手、歴史学者、系図学者、博識な吟唱家たちが、主の超人的な娯楽に感銘を受けてそれぞれの能力を次々と披露した。

要旨解説

この節から、5,000年まえの社会でも劇作家、芸術家、踊り手、歌手、歴史学者、系図学者、演説者たちが必要だったことがわかります。ダンサー、歌手、役者などはシュードラ社会の人々の仕事ですが、博学な歴史学者、系図学者、演説者はブラーフマナ社会の人々がその仕事をします。各自が特定の階級に属し、それぞれの家系で訓練を受けます。このような劇作家、踊り手、歌手、歴史学者、系図学者、演説者たちは通俗なことにはかかわらず、さまざまな時代や創造期での主の超人的な活動にまつわる話題を克明に表現します。また、それは年代順に描写されるわけではありません。どのプラーナでも、さまざまな時代や時や惑星にまつわる至高主に関連する歴史的事実が述べられています。それが年代順になっていない理由です。ですから現代の歴史学者は各史実をつなげて見ることができず、プラーナを想像上の話として勝手な結論を出しています。

インドでは100年まえでさえ、どの劇作家も至高主の超人的な活動を中心にして話をしていました。一般の人たちは演劇を心から楽しみ、ヤートラー (yātrā) の劇団は主の超人的な活動を巧みに演じ、こうして文字が読めない農民でさえ、学術的な資質はほとんどなくてもヴェーダ経典の知識にかかわることができます。一般の人たちを精神的に啓蒙させるためにも、熟達した劇を演ずる役者、踊り手、歌手、語り手たちが必要になります。系図学者は、特定の家族の子孫について完璧に説明をします。いまでも、インドの巡礼地にいる案内者は、初めて訪れる人たちに完璧な家系図をしめすことができます。このようなすばらしい活動をとおして、そのような重要な情報を得た観客たちがさらに魅了されていきます。

第21節

भगवांस्तत्र बन्धूनां पौराणामनुवर्तिनाम् ।
यथाविध्युपस्राम्य सर्वेषां मानमादधे ॥ २१ ॥

バハガヴァーンムス タトウラ バンドフウナーナム
bhagavāms tatra bandhūnām

パウラーナーナム アヌヴァルティナーナム
paurāṇām anuvartinām

ヤタハー・ヴィディ ウパサンガミヤ
yathā-vidhy upasaṅgamyā

サルヴェーシャーンム マーナンム アーダデハー
sarveṣāṁ mānam ādadhe

bhagavān—シュリー・クリシュナ、人格主神; *tatra*—その場所で; *bandhūnām*—友人たちの; *paurāṇām*—市民たちの; *anuvartinām*—主を歓迎するために来た人々; *yathā-vidhi*—義務として; *upasaṅgamyā*—近くに来ている; *sarveṣāṁ*—すべての人々に; *mānam*—名誉と敬意; *ādadhe*—捧げた。

主クリシュナ、人格主神は市民たちに近づき、迎えにきた友人、親族、市民など、すべての人々それぞれにふさわしい敬意をはらった。

要旨解説

最高人格主神は、決して非人格ではありませんし、献愛者の気持ちに応えられないような命のない存在ではありません。この節にある *yathā-vidhi* (ヤタハー・ヴィディ) 「当然の義務として」という言葉は重要です。主は「自分がなすべきこと」としてさまざまな称讃者や献愛者に応えているのです。もちろん純粋な献愛者は主以外に仕える人はいませんから、主もそのように接します。だからこそ主も純粋な献愛者たちに当然の義務として対応します、つまり、純粋な献愛者すべてに気を配っている、ということです。主には姿がないと考える人々がいますし、また主もそのような人々に個人的な興味をしめしません。主は、各自の精神的意識の高まりに応じて生命体たちを満足させます。そしてそのような対応の例が、主を迎えにきたさまざまな人々をとおして表わされています。

第22節

प्रह्वाभिवादनाश्लेषकरस्पर्शस्मितेक्षणैः ।
आश्वास्य चाश्वपाकेभ्यो वरैश्चाभिमतैर्विभुः ॥ २२ ॥

プラフヴァービヒヴァーダナーシュレーシャ・
prahvābhivādanāśleṣa-

カラ・スパルシャ・スミテークシャナイヒ
kara-sparśa-smitekṣaṇaiḥ

アーシュヴァーツシャ チャーシュヴァパーケービョー
āśvāsya cāśvapākebhyo

ヴァライシュ チャービヒマタイル ビブフ
varaiś cābhimatair vibhuḥ

prahvā—頭を下げることで; *abhivādana*—言葉で挨拶することで; *āsleṣa*—抱きしめて
いる; *kara-sparśa*—手を握っている; *smita-ikṣaṇaiḥ*—微笑みかけることで; *āśvāsya*—激
励することで; *ca*—そして; *āśvapākebhyaḥ*—犬を食べるような最下等の人々まで;
varaiḥ—恩恵によって; *ca*—もまた; *abhimataiḥ*—〜に望まれたように; *vibhuḥ*—全能者。

全能の主は、居あわせたすべての人々に、頭を下げたり、挨拶を交わしたり、抱擁したり、
手を取ったり、見つめたり、微笑んだり、約束したり、恩恵を授けたりしながら、出迎えに
応えた。最下級の人々にでさえ。

要旨解説

主シュリー・クリシュナを迎える人たちには、ヴァスデーヴァ、ウグラセーナ、ガルガム
ニ、すなわち父親、祖父、教師から、娼婦、犬を食べるチャンダーラまで、さまざまな人々
が含まれ、そのすべての人たちが、それぞれの地位に応じて主から適切な挨拶を受けました。
生命体はだれであっても主と分離した純粋な部分体ですから、必ず主との永遠な絆をもって
います。純粋な生命体は、物質自然の様式の穢れに応じてさまざまな段階に分けられますが、
主はその部分体がどのような物質的段階にいてもかれらを等しく愛しています。主はこのよ
うな物質的生命体を主の王国に呼びもどすために降誕するのであり、知性のある人は、人格
主神が生命体に与えたその機会を活用します。主はだれであっても神の王国に入ることを拒
みませんが、その世界を受けいれるかどうかは生命体にかかっています。

第 2 3 節

स्वयं च गुरुभिर्विप्रेः सदरैः स्थविरैरपि ।
आशीर्भिर्युज्यमानोऽन्यैर्वन्दिभिश्चाविशत्पुरम् ॥ २३ ॥

スヴァヤンム チャ グルビヒル ヴィプライヒ
svayam ca gurubhir vipraiḥ

サダーライヒ スタハヴィライル アピ
sadāraiḥ sthavirair api

アーシールビヒル ユヅジャマーノー ニヤイル
āśīrbhir yujyamāno 'nyair

ヴァンディビヒシュ チャーヴィシャトウ プランム
vandibhiś cāviśat puram

svayam—主自身; *ca*—もまた; *gurubhiḥ*—年長の親族たちによって; *vipraiḥ*—ブラーフ
マナたちによって; *sadāraiḥ*—彼らの妻たちと; *sthaviraiḥ*—病弱な; *api*—もまた;

āśīrbhiḥ—～の祝福によって; yujyamānaḥ—～に讃えられて; anyaiḥ—他の者たちによって; vandibhiḥ—称讃者たち; ca—そして; avīsat—入った; puram—都市。

そして主は都に入っていた。年長の親族たち、妻たちを伴った病弱なブラーフマナたちが主につづき、だれもが祝福を与え、主の栄光を歌っている。他の人々も主の栄光を讃えている。

要旨解説

ブラーフマナたちは、将来の隠遁生活のために貯金をすることなどまったく考えていませんでした。年をとって体が衰弱すると、妻とともに王の傘下に入り、王の栄光ある行動を讃えるだけの生活を始め、そして生活に必要なものすべてを受けとります。しかし、王にへつらっているというわけではありません。王はかれらの称讃によってじっさいに誉れ高い存在となり、ブラーフマナたちによって、威厳に満ちた、そして敬虔な生活をするよう力づけられます。主シュリー・クリシュナはあらゆる栄光に浴するに値する人物であり、讃えているブラーフマナや他の人々も、主の栄光を唱えることでさらに誉れ高い存在になるのです。

第 2 4 節

राजमार्गं गते कृष्णे द्वारकायाः कुलस्त्रियः ।
हर्म्याण्यारुरुहुर्विप्र तदीक्षणमहोत्सवाः ॥ २४ ॥

ラージャ・マールガム ガテー クリシュネー
rāja-mārgam gate kṛṣṇe

ドゥヴァーラカーヤーハ クラ・ストウリヤハ
dvārakāyāḥ kula-striyaḥ

ハルミヤーニ アールルフル ヴィプラ
harmyāṇi āruruhur vipra

タドゥ・イクシャナ・マホトウサヴァーハ
tat-ikṣaṇa-mahotsavāḥ

rāja-mārgam—公道; gate—通りすぎる時; kṛṣṇe—主クリシュナによって; dvārakāyāḥ—ドゥヴァーラカーの都の; kula-striyaḥ—高貴な家系の淑女たち; harmyāṇi—宮殿の上で; āruruhuḥ—上った; vipra—おお、ブラーフマナたちよ; tat-ikṣaṇa—主（クリシュナ）を見るためだけに; mahā-utsavāḥ—盛大な祭典と考えた。

主クリシュナが公道を歩くと、ドゥヴァーラカーに住む貴婦人たちが、主を見ようと宮殿の屋上にのぼった。この出来事を盛大な祭典と考えていたのである。

要旨解説

ドウヴァーラカーという都会の女性が考えたように、主を見つめる行為そのものがすばらしい祝典であることに疑いの余地はありません。これは、いまでもインドの信仰心篤い女性たちが従っていることです。とくに、ジュラナやジャンマーシュタミーの祭典になると、女性たちは、主の超越的かつ永遠な姿が崇拜されている寺院に大挙して集まってきます。寺院で祭られている主の超越的な姿は、主その方とまったく同じです。そのような主の姿をアルチャ・ヴィグラハ (*arca-vigraha*) あるいはアルチャー化身といい、物質界にいる無数の献愛者の奉仕を促進させるために、主が内なる力をとおして分身させた姿です。物質的な感覚では主の精神的な気質を知覚できないために、主は、見たかぎり、土、木、石といった物質で作られているアルチャ・ヴィグラハの姿を受けいれますが、その物質の姿に穢れはいささかもありません。主はカイヴァリヤ (*kaivalya*) 「唯一」であることから、主のうちに物質はないのです。主は絶対唯一の存在ですから、全能の主は、物質概念に穢されることなく、どのような姿をとおしてでも現われることができます。ですから、主の寺院でよくおこなわれている祭典は、約5000年前に主がドウヴァーラカーにいたときの祭典に似ています。精神的科学を知りつくした権威あるアーチャーリヤたちは、一般の人々のために規定原則どおりに主の寺院を建設しますが、精神的科学を知らない知性に欠ける人々は、その素晴らしい崇拜行為を偶像崇拜と解釈し、かれらの理解を越えていることなのいろいろな難癖をつけます。ですから、主の崇高な姿を見たい一心で主の寺院での祭典に参加する女性も男性も、主の崇高な姿を信じない者たちより1,000倍も尊いのです。

この節からは、ドウヴァーラカーの住民が壮麗な宮殿をもっていたことがわかります。この都市の繁栄を物語っているのです。女性たちはそのパレードと主を見ようと宮殿の屋上にあがりました。道路にいる人々といっしょに見ようとしなかったのですから、女性たちの尊厳が完璧に守られていたのです。男性との間違っただけの平等はありませんでした。女性の尊厳は、男性と離れていることでさらに上品に保たれます。異性同士は無制限に交わるべきではありません。

第25節

नित्यं निरीक्षमाणानां यदपि द्वारकौकसाम् ।
न वितृष्यन्ति हि दुःशः श्रियोधामारामच्युतम् ॥ २५ ॥

ニチャンム ニリークシャマーナーナーム
nityam nirikṣamāṇānām

ヤドゥ アピ ドウヴァーラカウカサーナム
yad api dvāraukasām

ナ ヴィトウリピヤンティ ヒ ドウリシャハ
na vitṛpyanti hi dṛśaḥ

シュリヨー ダハーマーンガナム アチュタンム
śriyo dhāmāṅgam acyutam

nityam—定期的に、いつも; nirikṣamāṇānām—主を見つめる者たちの; yat—ではあるが; api—~にもかかわらず; dvārakā-okasām—ドウヴァーラカーの住人たち; na—決してない; vitṛpyanti—満足して; hi—確かに; dṛśaḥ—見ること; śriyaḥ—美しさ; dhāma-aṅgam—肉体の根源; acyutam—完全無欠の方。

ドウヴァーラカーの住人たちは、すべての美の源、完全無欠の主を定期的に見るのが習慣になっていたのだが、主を見飽きることは決してなかった。

要旨解説

ドウヴァーラカーの女性たちが宮殿の屋上にあがったとき、完全無欠の主の美しい体をこれまで何度も見ていたことなど考えてもいませんでした。これは、主を見る望みは決して満たされないことを物語っています。物質的なものは何度も見てもやがてその魅力を失ってしまうものであり、それが自然の摂理です。飽満の原理は物質的なものに生じますが、精神界には存在しません。この節の「完全無欠」という言葉には重要な意味があります。主は私たちへの慈悲心から地上に降誕しましたが、それでも完全無欠の状態にありました。生命体は必ず間違いをおかします、なぜなら、物質界と接触することで本来の精神的正体を見失うため、物質の肉体は、物質自然界の法則によって誕生、成長、変質、条件、劣化、消滅という経過をたどるからです。主の体はそのような体ではありません。本来の姿で降誕し、決して自然界の法則に影響されることはありません。主の体は存在するものすべての源、私たちの経験を超えたあらゆる美しさの根源です。ですから、主の崇高な体を見てもぜったいに、だれも見飽きることはありません。見るたびに、さらに新しい美しさを感じるからです。超越的な名前、姿、気質、主にまつわる物事など、すべては精神的な表われであり、主の聖なる名前を唱えても、主の特質について語りあっても飽きることはありませんし、主にかかわることに限りはありません。主はすべての源であり、なおかつ無限な方なのです。

第26節

श्रियो निवासो यस्योरः पानपात्रं मुखं दृशाम् ।
बाहवो लोकपालानां सारराणां पदाम्बुजम् ॥ २६ ॥

シュリヨー ニヴァーソー ヤッショーラハ
śriyo nivāso yasyoraḥ

パーナ・パートウラム ムカハンム ドウリシャーナム

pāna-pātram mukham dṛśām

バーハヴォー ローカ・パーラーナナム

bāhavo loka-pālānām

サーランガーナナム パダーナムブジャンム

sāraṅgāṇām padāmbujam

śriyaḥ—幸運の女神の; *nivāsaḥ*—住む場所; *yasya*—～である方; *uraḥ*—胸;
pāna-pātram—容器; *mukham*—顔; *dṛśām*—目の; *bāhavaḥ*—腕; *loka-pālānām*—管理する
半神たちの; *sāraṅgāṇām*—真髄あるいは本質について語ったり歌ったりする献愛者たち
の; *pada-ambujam*—その蓮華の御足。

主の胸には幸運の女神が住んでいる。月のようなその顔は、美しいものを求める目のため
にある器である。主の腕は、管理する立場にある半神たちが身をゆだねる場所である。そし
て主の蓮華の御足は、主以外のことでは語りも歌いもしない純粋な献愛者たちが身をゆだね
る場所である。

要旨解説

多くの人々が、多様な対象からさまざまな楽しみを探しもとめています。幸運の女神の恩
寵を得ようとする人々がいます、そしてヴェーダ経典がそのような人たちのためにその場所
について情報を提供しています——木はすべて望みの木、建物はすべて試金石でできている
主の超越的住居・チンターマニ・ダーマ (*cintāmaṇi-dhāma*) (*1) で、主は何千何万
もの幸運の女神から深い敬意のこもった奉仕を受けている——と。主ゴーヴィンダはそこで、
スラビ牛の世話をするという自分本来の仕事をしています。そして、主の容姿の美しさに惹
かれる人はこの幸運の女神たちが見られるようになります。非人格論者は味気ない推論癖が
あるため、幸運の女神を見ることはできません。そして美しい創造物に惹かれている芸術家
たちは、主の美しい顔を見て完全な満足を感じるべきです。主の顔は美しさの権化です。芸
術家が語る美しい自然とは主の微笑みにほかならず、鳥たちの甘露なさえずりは、まさに主
のささやく声そのものです。半神たちは宇宙の管理という管轄の奉仕をまかされていますが、
国にも小さな管理の神々がいます。かれらは競争者をいつも怖がっていますが、主の腕に救
いをもとめれば、主は、かれらが敵から攻撃されるのを守ろうとします。管理奉仕に励む主
の忠実な召使いは理想的な幹部であり、一般市民の利益を適切に守ることができます。それ
以外のいわゆる管理者といわれる輩たちは、自分たちが統治する人々を苦境に落とし入れる
時代錯誤の象徴にすぎません。管理階級者は、主の腕の保護下にいれば安全です。一切万物
の根本は至高主です。主はサーラム (*sāram*) とも呼ばれますが、主について歌ったり語

ったりする人々をサーランガ (sāraṅga) ・純粋な献愛者といいます。純粋な献愛者は、いつも主の蓮華の御足を求めています。その御足にはある種の蜜が含まれており、献愛者はその超越的な蜜を味わいます。そのような献愛者は、いつも蜜を求めているミツバチにたとえられます。ガウディーヤ・ヴァイシュナヴァ・サンプラダーヤの偉大な献愛者でありアーチャーリヤであるシュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーは、この蓮華の蜜について歌い、自分をミツバチと比べています。「我が主よ。私はあなたに祈りを捧げます。私の心は、蜜を求めるミツバチです。ですから、どうかそのような私の心に、すべての超越的蜜の源であるあなたの蓮華の御足という場所をお与えください。私は知っています、ブラフマーのような巨大な半神たちでさえ長い歳月をかけて深い瞑想をしても、あなたの蓮華の御足の爪から放たれている輝きが見えないことを。おお完全無欠なお方よ、それでも私はその大望をいただいています。身をゆだねた献愛者にあなたはひじょうに慈悲深いからです。主マーダヴァよ、私は自分があなたの蓮華の御足に本物の献愛の心を持っていないこともわかっています、しかし、あなたは私たちには想像もできないほどの力をお持ちですから、不可能なことさえすることができます。あなたの蓮華の御足の味は、天上の王国にある甘露さえ遠くおよびません。だからこそ私はその御足にこれほど魅了されているのです。至上の、そして永遠なる方よ。ですから、どうか私の心があなたの蓮華の御足に定められますように、そのことであなたへの超越的奉仕の甘露を味わえるように」。献愛者は、主の蓮華の御足の元に置かれることで心から満たされ、あらゆる美しさをたたえた主の顔を見ようという気持ちも、主の力強い腕で守られたいという熱意もありません。生来謙虚な心を持っているからこそ、主はそのような献愛者には心を傾けようとするのです。

*

チンターマニ・プラカラ・サドゥマス カルパ・ヴリクシャ・
cintāmaṇi-ṭrakara-sadmasu kalpa-vṛkṣa-

ラクシャーヴリテーシュ・スラビヒル アビヒパーラヤンタンム
lakṣāvr̥teṣu surabhīr abhipālayantam

ラクシュミー・サハスラ・シャタ・サンムプッラマ・セーヴァマーナンム
lakṣmī-sahasra-śata-sambhrama-sevyamānaṁ

ゴーヴィンダンム アーディ・プルシャンム タンム アハンム バハジャーミ
govindam ādi-ṭpuruṣaṁ tam ahaṁ bhajāmi

(『ブラフマ・サムヒター』第5章・第29節)

第27節

सितातपत्रव्यजनैरुपस्कृतः

प्रसूनवर्षैरभिवर्षितः पथि ।

पिश्रावासा वनमालया बभौ
घनो यथार्कोदुपचापवैद्युतैः ॥ २७ ॥

シタータパトウラ・ヴァジャナイル ウパスクリタハ
sitātapatra-vyajanaṅgair upaskṛtaḥ

プラスーナ・ヴァルシャイル アビヴァルシタハ パテヒ
prasūna-varṣair abhivarṣitaḥ pathi

ピシャンガ・ヴァーサー ヴァナ・マーラヤー ババハウ
piśaṅga-vāsā vana-mālayā babhau

ガハノー ヤタハールコードウパ・チャーパ・ヴァイデュタイヒ
ghano yathārkoḍupa-cāpa-vaidyutaiḥ

sita-ātapatra—白い日傘; *vyajanaṅgair*—チャーマラの扇で; *upaskṛtaḥ*—〜に仕えられて;
prasūna—花; *varṣair*—シャワーによって; *abhivarṣitaḥ*—そのように覆われて; *pathi*—道
路で; *piśaṅga-vāsā*—黄色の衣服によって; *vana-mālayā*—花輪によって; *babhau*—その
ようになった; *ghanaḥ*—雲; *yathā*—〜のように; *arka*—太陽; *uḍupa*—月; *cāpa*—虹;
vaidyutaiḥ—稲光によって。

主がドウヴァーラカーの道路を歩いているあいだ、主の頭は白い日傘で陽光から守られていた。白い羽の扇が半円形に動き、花ふぶきが道に舞い落ちる。黄色の衣服と花輪に飾られた主の様子は、あたかも黒い雲が太陽、月、稲妻、虹に同時に囲まれているかのように見える。

要旨解説

太陽、月、虹、稲妻が空に同時に現われることはありません。太陽が照っていれば月の光はほとんど感じられませんし、雲と虹があれば稲妻は現われません。主の体の色は、みずみずしいモンスーンの雲に見えます。主はこの節で雲に、そして主の頭上にかざされた白い日傘は太陽にたとえられています。白チャーマラ扇の動きが月に、花びらのシャワーは星々にたとえられています。さらに、主の黄色の衣服が虹にたとえられています。このような大気での現象や動きは同時には存在しないことから、ただ比較するだけで理解できるものではありません。このような現象は、主の想像を絶する力を考えてこそ納得できるものです。主はあらゆる力をそなえており、主がいれば、主の想像を絶する力によってどのような不可能なことでも可能になります。しかし、主がドウヴァーラカーの道を歩いていたときにかもし出された情景はたとえようもなく美しく、自然現象と比べてこそはじめて説明できるのです。

第 28 節

प्रविष्टस्तु गृहं पित्रोः परिष्वक्तः स्वमातृभिः ।
ववन्दे शिरसा सप्त देवकीप्रमुखा मुदा ॥ २८ ॥

プラヴィシュタス トウ グリハンム ピトウローホ
praviṣṭas tu gṛham pitroḥ

パリシュヴァクタハ スヴァ・マートウリビヒ
pariṣvaktāḥ sva-mātr̥bhiḥ

ヴァヴァンデー シラサー サプタ
vavande śirasā sapta

デーヴァキー・プラムカハー ムダー
devakī-pramukhā mudā

praviṣṭaḥ—入ったあと; *tu*—しかし; *gṛham*—家; *pitroḥ*—父親の; *pariṣvaktāḥ*—抱擁した; *sva-mātr̥bhiḥ*—自分の母親によって; *vavande*—敬意を払った; *śirasā*—主の頭; *sapta*—7人; *devakī*—デーヴァキー; *pramukhā*—～を筆頭に; *mudā*—喜んで。

主は、父の家に入ったあと、出迎えた母親たちに抱擁され、二人の足元に頭をつけて敬意を表した。母親とは、デーヴァキー（主の実母）をはじめとする女性たちである。

要旨解説

主クリシュナの父親ヴァスデーヴァには、シュリーマティー・デーヴァキーを筆頭にした18人の妻たちが住む別々の住居をかまえていました。しかし、どの継母たちも主に等しく愛情を注いでいたことが次の節からもわかります。主クリシュナも、実母と継母を区別して見ることはなく、出迎えたヴァスデーヴァの妻たち全員に敬意を表しています。経典には7人の母親がいる、と書かれています。(1) 実母、(2) 精神指導者の妻、(3) ブラーフマナの妻、(4) 王の妻、(5) 牛、(6) 乳母、(7) 大地。どれも母親として見なくてはなりません。このシャーストラの教えから、父親の妻でもある継母も母親と同じです。父親は精神指導者のひとりと考えられるからです。宇宙の主である主クリシュナは、理想の息子としてふるまい、継母に対してどう接するかを私たちに教えています。

第 29 節

ताः पुत्रमङ्गमारोप्य स्नेहस्रुतपयोधराः ।
हर्षविह्वलितात्मानः सिषिचुर्नेत्रजैर्जलैः ॥ २९ ॥

ターハ プトウランム アンカンム アーローピヤ
tāḥ putram aṅkam āropya

スネーハ・スヌタ・パヨーダハラハ
sneha-snuta-payodharāḥ

ハルシャ・ヴィフヴァリタートウマーナハ
harṣa-vihvalitātmānaḥ

シシチュル ネットウラジャイル ジャライヒ
siṣicur netrajair jalaiḥ

tāḥ—彼女たち全員; *putram*—息子; *aṅkam*—膝; *āropya*—～に置いて; *sneha-snuta*—愛情で潤って; *payodharāḥ*—～で満たされた乳房; *harṣa*—嬉しさ; *vihvalita-ātmānaḥ*—～で満たされて; *siṣicuh*—濡れて; *netrajaiḥ*—目から; *jalaiḥ*—水。

母親たちは、息子を抱きしめたあと主を膝に乗せた。無垢な愛情から、母親たちの胸から母乳があふれだしている。歓喜に満たされたかのじよたちは、涙で主を濡らすのだった。

要旨解説

主クリシュナがヴリンダーヴァンにいたころ、牛たちでさえ主への愛情ゆえに乳房は母乳で濡れていました。主は、自分に愛情を寄せるどのような生物の乳首からでも母乳を引きだのですから、母親と同じ境地にいる継母たちが表わした愛情のきざしは当然のことだったのです。

第30節

अथाविशत् स्वभवनं सर्वकाममनुत्तमम् ।
प्रासादा यत्र पत्नीनां सहस्राणि च षोडश ॥ ३० ॥

アタハーヴィシャトウ スヴァ・バハヴァナンム
athāviśat sva-bhavanam

サルヴァ・カーマンム アヌッタマンム
sarva-kāmam anuttamam

プラーサーダー ヤトウラ パトウニーナナム
prāsādā yatra patnīnām

サハスラーニ チャ ショーダシャ
sahasrāṇi ca ṣoḍaśa

atha—そのあと; *aviśat*—入った; *sva-bhavanam*—自分の宮殿; *sarva*—すべて; *kāmam*—望み; *anuttamam*—あらゆる面で完璧な; *prāsādāḥ*—宮殿; *yatra*—～の場所;

patnīnām—～人の妻たちの; sahasrāṇi—数千; ca—それに加えて; ṣoḍaśa—16。

そのあと主は、非の打ちどころのない宮殿に入った。妻たちが住んでいたのだが、その数は16,000人以上にのぼった。

要旨解説

主クリシュナには16,108人の妻がおり、その一人ひとりが生活に必要な屋敷や庭園を完全にそなえた宮殿に住んでいました。この宮殿については、本書の第10編に詳述されています。どの宮殿も最上級の大理石で作られ、宝石の光で輝き、金のレースや刺繍で見事に装飾されたベルベットや絹のカーテンや絨毯で飾られていました。人格主神は、あらゆる力、あらゆる力、あらゆる富、あらゆる美しさ、あらゆる知識、あらゆる放棄心を完全にそなえた人物です。ですから主の宮殿には、主の望みをすべて満たす環境が整えられていました。主は無限な方ですから主の望みも無限であり、その供給も無限です。すべてが無限ですから、この節では、sarva-kāmam (サルヴァ・カーマンム) 「望みどおりの品々がすべてそなわっている」という簡潔な言葉が使われています。

第31節

पत्न्यः पतिं प्रोष्य गृहानुपागतं
विलोक्य सञ्जातमनोमहोत्सवाः ।
उत्तस्थुरारात् सहसासनाशयात्
साकं व्रतैर्व्रीडितलोचनाननाः ॥ ३१ ॥

パトウニヤハ パティンム プローツシャ グリハーヌパーガタンム
patnyah patim proṣya gṛhānupāgatam

ヴィローキヤ サンジャータ・マノー・マホートウサヴァーハ
vilokya sañjāta-mano-mahotsavāḥ

ウッタストフウル アーラートウ サハサーサナーシャヤートウ
uttasthur ārāt sahasāsanāśayāt

サーカンム ヴラタイル ヴリーディタ・ローチャナーナナーハ
sākam vratair vṛīḍita-locanānanāḥ

patnyah—淑女たち (主シュリー・クリシュナの妻たち); patim—夫; proṣya—家を離れていた方; gṛha-anupāgatam—今、家に戻ってきた; vilokya—そのように見ている; sañjāta—高めて; manah-mahā-utsavāḥ—心の中での喜びに満ちた儀式の感情; uttasthuḥ—立ち上がった; ārāt—遠くから; sahasā—突然; āsanā—座っていた席から;

āśayāt—瞑想の境地から; sākam—〜と共に; vrataiḥ—誓い; vṛīḍita—恥ずかしそうに見つめている; locana—目; ānanāḥ—そのような顔で。

主シュリー・クリシュナの後たちは、長く国外にいた夫を見る喜びを心のなかで味わっていた。座って瞑想していた席からすぐに立ちあがり、社会の慣習にならってヴェールで顔を覆い、はにかむように主を見つめた。

要旨解説

上記のように、主は16,108人の女王が住む自分の宮殿に入りました。これは、主がすぐさま自分の体を女王たちと宮殿と同じ数に、まったく同じに、そして別々に分身させたということです。ここに主の内なる力を見ることができます。主は絶対唯一の方ですが、望みどおりに自分の精神的な姿を無数に分身させることができます。シュルティ・マントラで確認されているように、絶対真理者は唯一の方ですが、望んだ瞬間に自らを無数に分身させることができます。この至高主の無数の分身体は、完全分身から分離した分身として現わされます。分離した分身とは、主の力の現われのことで、完全分身とは主自らの現われです。このように、人格主神は自らを16,108に分身させ、同時に女王たちの宮殿に入りました。これが *vaibhava* (ヴァイバハヴァ)、すなわち主の超越的な力です。そして、主はそれができるからこそ、ヨーゲーシュヴァラ (Yogeśvara) という名前でも知られています。ふつう、ヨーギー・神秘的な生命体は、自分の体を10倍に分身させることができますが、主は何千もの、あるいは際限なく望みどおりに分身させることができます。信仰心を持たない人々は、主クリシュナが16,000人以上の王女と結婚したことを聞いて驚きます。主クリシュナを自分と同じ人間と考えていますし、限られた能力で主の力のことを判断するからです。ですから、主は、主の中間の力の現われにすぎないふつうの生命体とは異なる段階にあることを知るべきであり、また力と力の源を、質的にはほとんど違いはなくても、同じものとして見てはなりません。女王たちも主の内なる力の現われですから、双方の関係は、力と力の源が、崇高な娯楽という超越的な楽しみを永遠に交わしていると解釈すべきです。ですから、主がこれほど多くの女性と結婚したことを聞いても驚くに値しません。たとえ160億人の妻と結婚したとしても、主は自らの無限・無尽蔵の力を完全に表わしたわけではないと確信しなくてはなりません。主はたった16,000人の女性と結婚し、それぞれの宮殿に入った——それは、主は人類史上のどれほど力強い人間とも比較にならず、劣らないことを世に知らしめるためにそうしたので。ですから、だれも主と等しく、主を凌ぐ者はいません。主は、あらゆる面でつねに偉大な方です。「神は偉大である」という表現は、永遠の真理なのです。

ですから、クルクシェートラの戦いに加わるために長く国外にいた夫を離れたところから見た女王たちは、深い瞑想から覚め、こよなく愛する夫を迎える準備をしました。『ヤーギ

『チャヴァルキヤ』の宗教の教えによると、夫が家庭から離れている妻は、社会の行事に参加したり、化粧をしたり、笑ったり、どのような状況でも親族の家に行ってはいけない、とされています。これが、夫が家を離れている女性の誓いです。また、妻はよごれた格好で夫のまえに姿を見せてはいけない、と言われていました。宝石を身につけ、清潔な衣服を身につけ、そして幸福な、あるいは楽しい気持ちで接しなくてはならない、とも言われています。主クリシュナの後たちは全員瞑想し、主がいないことを考え、いつも主のことを瞑想していました。主の献愛者は、主を瞑想しなければ一瞬たりとも生きられません。ですから、女王となってドウヴァーラーカーでの主の娯楽に加わった幸運の女神たちも同じです。主がその場いなければ、あるいは主を瞑想しなければ、主と離れては生きていけないのです。ヴリンダーヴァンのゴーピーたちは、少年だった主が牛たちを森に連れていっているあいだ片時も主が忘れられませんでした。主クリシュナが村から離れているあいだ、家にいるゴーピーたちは、主がやわらかい蓮華の御足で荒れた地面を歩いている姿を思って心配していました。その思いから沸きあがる法悦心に包まれたり、心を痛めたりしていました。それが主の純粋な交流者の境地であり、女王たちも、主がそばにいないければ法悦の境地に浸っていました。そしていま、遠くから主を見たかのじよたちは、これまで述べた女性としての誓いを含め、一切の家事をやめました。シュリー・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラによると、この出来事には、一連の真理状態が見られます。まず、座っていた席を立ちあがったものの、夫を見つめたかったけれども女性特有の恥じらいゆえに思いとどまっています。しかし強い法悦心ゆえに、その恥じらいよりも主を抱きしめたいという考えが強くなり、その結果、自分が置かれている状況をすべて忘れました。この頂点の法悦の境地ゆえに形式的なことも社会的慣習も一切どうでもよくなり、主に会う道にある障害すべてを克服することができました。これこそが、魂の主人、シュリー・クリシュナに会う完璧な境地なのです。

第32節

तमात्मजैर्दृष्टिभिरन्तरात्मना
दुरन्तभावाः परिरेभिरे पतिम् ।
निरुद्धमप्यास्रवदम्बु नेत्रयो-
र्विलञ्जतीनां भृगुवर्य वैचा वात् ॥ ३२ ॥

タンム アートウマジャイル ドウリシュティビヒル アンタラートウマナー
tam ātmajair dṛṣṭibhir antarātmanā

ドウランタ・バーヴァーハ パリレービヒレー パティンム
duranta-bhāvāḥ parirebhire patim

ニルッダハンム アピ アースラヴァドウ アンブ ネートウラヨール
niruddham apy āsra vad ambu netrayor

ヴィラッジャティーナーム ブリグ・ヴァリヤ ヴァイクラヴァートウ
vilajjatīnām bhṛgu-varya vaiklavāt

tam—その方（主）に; ātma-jaiḥ—子息たちによって; dṛṣṭibhiḥ—その光景によって; antara-ātmanā—心のもっとも深い部分によって; duranta-bhāvāḥ—抑えることのできない法悦心; parirebhire—抱擁した; patim—夫; niruddham—詰まった; api—にもかかわらず; āsravat—涙; ambu—水のしたたりのように; netrayoḥ—目から; vilajjatīnām—恥じらいの心境にいる人々の; bhṛgu-varya—ブリグたちの筆頭者よ; vaiklavāt—意図することなく。

恥じらいを感じていた女王たちは、抑えきることのできない法悦境の強さに、まず心の奥底で主を抱きしめた。次に目で抱きしめ、そして子どもたちに主を抱きしめにかせた（それは自分たちが抱きしめることと同じである）。ブリグ家の筆頭者よ。しかし、あふれる思いを抑えようとしても、ひとりでに涙があふれてくるのだった。

要旨解説

女王たちは、女性としての恥じらいゆえに、愛しい夫・主シュリー・クリシュナを抱きしめられない妨げが多くあったのですが、主を見つめたり、主を心の奥底に置いたり、そして我が子たちに主を抱かせたりすることでその思いを満たしました。それでも、ほんとうに抱きしめたわけではありませんから、涙がとめどなくあふれるのでした。妻は、我が子に夫を抱かせることで間接的に夫を抱きしめます。その子は母親の体の一部として成長したからです。子を抱きしめることは、性的な点から見れば夫と妻の抱擁そのものとは言えませんが、愛情の点から見れば夫の心は満たされます。見つめあうことによる抱擁は、愛する者同士のあいだではさらに強い心の高まりがありますから、シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーの見解は、そのような夫と妻の感情交換に不適切なことはない、と説明しています。

第33節

यद्यप्यसौ पार्श्वगतो रहोगत-
स्तथापि तस्याङ्घ्रियुगं नवं नवम् ।
पदे पदे का विरमेत तत्पदा-
च्चलापि यच्छ्रीर्न जहाति कर्हिचित् ॥ ३३ ॥

ヤデャピ アサウ パールシュヴァ・ガトー ラホー・ガタス
yadyapy asau pārśva-gato raho-gatas

タタハーピ タッシャーングフリ・ユガンム ナヴァンム ナヴァンム

tathāpi tasyāṅghri-yugam navam navam

パデー パデー カー ヴィラメータ タトゥ・パダーチ
pade pede kā virameta tat-padāc

チャラーピ ヤチ チヒリール ナ ジャハーティ カルヒチトゥ
calāpi yac chrīr na jahāti karhicit

yadi—～であっても; api—確かに; asau—主(主シュリー・クリシュナ); pārśva-gataḥ—まさに近くにいる; rahaḥ-gataḥ—完全にひとりだけ; tathāpi—それでも; tasya—主の; aṅghri-yugam—主の御足; navam navam—ますます新しい; pede—歩み; pede—すべての歩みで; kā—～である者; virameta—～から離れることができる; tat-padāt—主の御足から; calāpi—動いている; yat—～である者を; śrīḥ—幸運の女神; na—決して～ない; jahāti—終える; karhicit—いつでも。

主シュリー・クリシュナはいつでも后たちの横にいたし、また主は一人しかいなかったけれども、かのじよたちにとって主の御足は見るたびに新しく思えた。幸運の女神はいつも落ちつくことなく動いているが、主の御足からはなれることはできなかった。ならば、ひとたび身をゆだねたその御足から離れられる女性が、はたしているだろうか。

要旨解説

条件づけられた生命体は、ひとところに定着しない性格を持つ幸運の女神に恩寵を求めています。この世界で生きているかぎり、どれほど賢い人であっても永遠に幸運ではられません。世界のさまざまな場所に巨大な帝国が築かれ、強い皇帝が国を治め、数多くの幸運な人たちが現われましたが、やがて次々に姿を消していきました。これが物質自然の法則です。しかし精神界ではそのようなことはありません。『ブラフマ・サムヒター』によると、主は数えきれないほどの幸運の女神から深い敬意をこめて仕えられています。女神たちはいつもだれもいない場所で、そして主といっしょにいます。しかしそれでも、主との交流からは尽きることのない新鮮な満足感が得られるため、本来いつも落ちつくことなく動いている女神たちですが、主から一瞬たりとも離れることができません。主との精神的関係からは大きな活力と知恵が得られるため、主にひとたび身をゆだねれば、主から離れることができなくなります。

生命体は、その本来女性の立場にあります。男性あるいは楽しむ側にいるのが主であり、主のさまざまな勢力の表われは、もともと女性です。『バガヴァッド・ギーター』で、生命体はparā-prakṛti(パラ・プラクリティ)「優位の力」と呼ばれています。物質要素はaparā-prakṛti(アパラ・プラクリティ)「下位の力」です。そのような力はつねに使用者、あるいは享樂者の満足のために使われます。至高の享樂者は主自身であり、それは『バガヴァッド・ギーター』

(第5章・第29節)でも述べられています。ですからそれらの力は、主への奉仕に直接使われるときに自然な色彩をよみがえらせ、その結果、力と力の源に違いはなくなります。

政府や国のなかで奉仕をしている人は、その最高の享樂者の元でなにかの地位を求めているものです。主は宇宙の内でも外でも万物の至高の享樂者ですから、主に雇用されることで幸福になります。主の至高の政府の奉仕にひとたび加われれば、その奉仕をやめたいと思う生人はいません。人間生活の最高完成は、主の至高の奉仕に参加できるよう願うことにあります。それが私たちをこのうえない幸せに導いてくれます。主との関係がなければ、いつも動いている幸運の女神を得ることはできません。

第34節

एवं नृपाणां क्षितिभारजन्मना-
मक्षौहिणीभिः परिवृत्तेजसाम् ।
विधाय वैरं श्वसनो यथानलं
मिथो वधेनोपरतो निरायुधः ॥ ३४ ॥

エーヴァンム ヌリパーナーンム クシティ・バハラー・ジャンマナーンム
evam nṛpāṇām kṣiti-bhāra-janmanām

アクシャウヒニービヒヒ パリヴリッタ・テージャサーンム
akṣauhiṇībhiḥ parivṛtta-tejasām

ヴィダハーヤ ヴァイランム シュヴァサノー ヤタハーナランム
vidhāya vairam śvasano yathānalam

ミトホー ヴァデヘーノーパラトー ニラーユダハ
mitho vadhenoparato nirāyudhaḥ

evam—こうして; *nṛpāṇām*—王たち、あるいは政治家たちの; *kṣiti-bhāra*—地球の重荷; *janmanām*—そのように生まれた; *akṣauhiṇībhiḥ*—馬、象、馬車、軍などの軍事力によって勢力を得て; *parivṛtta*—そのような環境のために思い上がって; *tejasām*—力; *vidhāya*—作り出して; *vairam*—敵意; *śvasanaḥ*—風と管植物との相互の影響; *yathā*—そのように; *analam*—火; *mithaḥ*—互いに; *vadhena*—彼らを殺すことで; *uparataḥ*—救った; *nirāyudhaḥ*—そのような戦いに主自ら加わることなく。

主は、地上の重荷になっていた王たちを殺したあと、安堵した。かれらは、馬、象、戦闘馬車、軍隊など、膨大な軍事力を得たことで傲慢になっていた。主自身はこの戦闘に参加していない。強大な政治家たちのあいだで敵意をあおり、かれらを激突させたのである。主は、竹をこすりあわせて火を作りだす風のような存在である。

要旨解説

この節に述べられているように、生命体は、神の創造物として表わされた物事を楽しむ存在ではありません。主は、みずから創造した世界にある万物の真の所有者・享樂者です。残念なことに、幻惑の力に影響された生命体は自然界の様式に指図されるままに偽の享樂者になっています。神になるという間違った考えで横柄になって当惑した生命体たちは、さまざまな活動をとおして物質的な力を身につけたために地上の重荷になり、その結果、地球は健全な精神を持つ人々には住めない場所に変わりはてます。この状況を *dharmasya glāni* (ダハルマッシャ グラーニ)、つまり「人類の力の誤用」といいます。人間の力がまちがって使われると、分別ある人々は、地球の重荷である邪悪な政治家が作りだす苦境に混乱させられるため、主はそのような人々を救うために内的力をとおして降誕し、世界各地の物質的政治家たちが作りだす苦境を緩和させるのです。主は、不要な政治家をひいきにすることはありませんが、自分の力でその政治家のあいだに敵意を作りだします。それはあたかも、空気が森の竹同士を摩擦させて火を起こす現象に似ています。山火事は空気力で自然発生しますが、同じように、政治家たちの敵意も主の見えない計画によって作りだされています。望ましくない政治家たちは、偽りの経済力と政治力で横柄になっており、意見を対立させ、全力を使い果たして疲れきっています。世界の歴史には主の意志がそのまま写しだされており、それは生命体たちが主への奉仕に没頭できるようになるまでつづきます。『バガヴァッド・ギーター』（第7章・第14節）はこの事実を鮮明に述べています。その節では、「その幻惑させる力はわたしの力であり、従属的立場にある生命体には、物質界の様式の力を克服することはできない。しかし、わたし（人格主神シュリー・クリシュナ）に身をゆだねる者は、物質界という巨大な海を渡りきることができる」と言われています。これは、結果にこだわる活動や推論的哲学や空論では世界に平和や繁栄をもたらすことはできない、ということです。唯一の方法は至高主への服従であり、そのことで幻惑エネルギーの幻想から解放されます。

あいにく、破壊的な仕事をしている人々は人格主神に身をゆだねることができません。一流の愚か者たち、そして最低の人類といえます。学術的知識をそなえているように見えても、じつは知識を奪われています。邪悪な心に満ち、いつも主の至高の力に対抗しています。ひじょうに物質的で、つねに物質的な力をもとめ、生命体についてなにも知らないどうしようもない愚か者であり、至高の精神的科学を知らないため、肉体の終わりとともに消滅する物質的科学に没頭しています。人間生活は主との失われた絆を取りもどすためにあるのですから、かれらは最低の人類と言え、物質的なおこないに没頭しているためにその機会を失っています。知識を奪われている、と言えるのは、長年推測しても人格主神という万物の至高善を知る境地に到達できないからです。そして、全員が邪悪な主義主張を持っており、そしてその結果に苦しめられています。その代表者が、ラーヴァナ、ヒラニャカシプ、カムサという物質的な英雄です。

第35節

स एष नरलोकेऽस्मिन्नवतीर्णः स्वमायया ।
रेमे स्त्रीरत्नकूटस्थो भगवान् प्राकृतो यथा ॥ ३५ ॥

サ エーシャ ナラ・ローケー スミン
sa eṣa nara-loke 'sminn

アヴァティールナハ スヴァ・マーヤヤー
avatīrṇaḥ sva-māyayā

レーマー ストゥリー・ラトゥナ・クータストホー
reme strī-ratna-kūṭastho

バハガヴァーン プラークリトー ヤタハー
bhagavān prākṛto yathā

sah—かれ（最高人格主神）； eṣah—これらすべて； nara-loke—人類の住むこの惑星で； asmin—この上で； avatīrṇaḥ—現われて； sva—個人的な、内的な； māyayā—いわれのない慈悲； reme—楽しんだ； strī-ratna—主の妻になる資格を持つ女性； kūṭasthaḥ—～のあいだで； bhagavān—人格主神； prākṛtaḥ—通俗な； yathā—まるで～だったかのように。

その最高人格主神シュリー・クリシュナが、いわれなき慈悲心からこの惑星に降誕し、自分にふさわしい女性たちとのふれあいを楽しんだ。あたかも通俗なことをしているかのよう

要旨解説

主は結婚し、ふつうの世帯者のように暮らしました。確かに通俗なことに見えますが、16,108人の女性と結婚し、それぞれ別の宮殿に同時に住んでいたのですから、もちろんそれは通俗なことではありません。ですから主が自分にふさわしい妻たちと世帯者として暮らしたことは決して俗なことではありませんし、妻たちとの行動は俗な性的関係として理解できるものではありません。もちろん、主の妻になった女性たちもふつうの女性ではありません。主を夫として迎えるのは、何百万回ものタパッシャ（苦行）を経た誕生の結果なのです。主はさまざまなローカ（loka）・惑星や人間のあいだに降誕し、崇高な娯楽を繰りひろげて条件づけられた魂たちを魅了させ、そしてかれらを精神界での主の永遠な召使い、友人、両親、恋人にして、その世界で永遠に奉仕の交換を味わいます。奉仕は物質界でゆがんだ形で表わされており、その関係は突然こわれ、悲しい結果を作りだします。物質自然によって条件づけられて幻惑された生命体は、無知ゆえに、俗世界にある関係がはかないことも、欠点だらけであることも知りません。そのような関係が私たちが永遠の幸福に導くことはできま

せんが、その関係が主とのあいだで築かれれば、物質の肉体を終えたあとに崇高な世界に移され、私たちが望んでいた主との永遠の関係を築くことができます。ですから、主を夫として迎えた女性たちは俗界の生命体ではなく、崇高な妻として主と永遠の絆を持っており、献愛奉仕を完成させたことで到達した境地にいるのです。それがこの女性たちの特質でした。主は至高善、最高人格主神です。条件づけられた魂は、どのような場所でも——地球はもちろん宇宙のほかの惑星でも——永遠の幸福を求めています。それは、精神的火花は神の創造世界のどこにでも行けるからです。しかし、物質自然の様式に条件づけられているため、宇宙船に乗って宇宙を移動しようとしても目指す星に到達することはできません。重力の法則が、囚人の足かせのようにその飛行士を縛りつけているのです。別の方法を使えばどこにでも行けるのですが、たとえ頂点の惑星に達したとしても、幾生涯をかけて探してもとめている永遠の幸福は得られません。しかし迷いから覚めれば、ブラフマンの幸福を求めるようになります。その幸福がいままで探していた、しかも物質界ではぜったいに見つからない無限の幸福であることに気づくからです。ですからもちろん、至高の生物パラブラフマン (Parabrahman) が物質界で幸福を求めることはありません。また主が説いている幸福の環境は物質界にあるはずがありません。主は非人格ではありません。主は無数の生命体の指導者、そして至高の生物ですから、姿がないわけがありません。私たちと同じ存在であり、個々の生命体にある性質をすべて完全にそなえています。私たちと同じように結婚しますが、その結婚は、私たちが条件づけられた状態で体験しているような通俗でも制約されたものでもありません。ですから、主の妻たちはふつうの女性たちに見えても、じつはだれもが解脱を達成した超越的な魂たちであり、内的力の完璧な現われなのです。

第36節

उद्धामभावपिशुनामलवल्गुहास-
 व्रीडावलोकनिहतो मदनोऽपि यासाम् ।
 सम्मुह्य चापमजहात्प्रमदीत्तमास्ता
 यस्येन्द्रियं विमथितुं कुहकैर्न शेकुः ॥ ३६ ॥

ウッターマ・バハーヴァ・ピシュナーマラ・ヴァルグ・ハーサ・
 uddāma-bhāva-piśunāmala-valgu-hāsa-

ヴリーダーヴァローカ・ニハトー マダノー ピ ヤーサーナム
 vṛīḍāvaloka-nihato madano 'pi yāsām

サンムヒヤ チャーパンム アジャハートウ プラマドローッタマース ター
 sammuhya cāpam ajahāt pramadottamās tā

ヤッシュェンドウリヤナム ヴィマテヒトウンム クハカイル ナ シェークフ
 yasyendriyam vimathitum kuhakair na śekuḥ

uddāma—非常に荘厳な; bhāva—表情; piśuna—心が高鳴る; amala—無垢な; valgu-hāsa—美しい微笑み; vṛīḍa—目尻; avaloka—見ている; nihataḥ—打ち負かす; madanaḥ—天使（あるいはアマダナ・amadana —非常に忍耐強いシヴァ; api—もまた; yāsām—～である者; sammuhya—～に打ち負かされて; cāpam—弓; ajahāt—捨て去った; pramada—～を高揚させる女性; uttamāḥ—高い段階の; tā—すべて; yasya—～である; indriyam—諸感覚; vimathitum—混乱させること; kuhakaiḥ—魔法のような手段で; na—決してない; śekuḥ—出来た。

女王たちの美しい微笑みとひそやかなまなざしは純粹無垢で、男性の胸をときめかせはするものの、天使が弓を捨ててしまうほどの魅力で天使を打ち負かすことはできるものの、忍耐強いシヴァでさえとりこにすることはできても、さらには女王たちの幻惑させる力や魅力を駆使しても、主の感覚を刺激することはできなかった。

要旨解説

救われる道、すなわち神のもとに帰る修行の道では、女性とのつきあいはつねに禁じられており、また完全なサナータナ・ダルマ (sanātana-dharma)、あるいはヴァルナーシュラマ・ダルマ (varṇāśrama-dharma) の制度では、女性との交わりは禁止・制限されています。だとしたら、16,000人以上の妻をめぐらしたという最高人格主神をそのまま受け入れることができるだろうか——これは、至高主の超越的な気質を知ろうとする探求心ある人々の正直な質問です。そのような質問に答えるために、ナイミシャラニヤの聖者たちは、この節と次につづく節で主の超越的な気質について話しあっています。この節で明確なことは、天使や、だれよりも忍耐心のある主シヴァをも克服できる女性の魅力でさえ、主の感覚は征服できない、ということです。天使がするのは、俗な情欲を高めることです。全宇宙がその天使の矢に刺激されて動いています。世界の活動は、男女間の魅力が中心になっておこなわれています。男性は自分の好みに応じた女性を求め、女性は自分にふさわしい男性を探しています。物質的な刺激はそうにして発生します。そして男性が女性と結ばれたときから、生命体の物質的束縛は性的関係をとおして堅く結ばれ、その結果として、楽しい家庭、国、子孫、社会、友人関係、財産の蓄積などに対する魅力が幻の活動の場となり、こうして偽りの、しかし同時に苦しみだらけの一時的物質存在に対する飽くことのない魅力が作りだされます。ですから、ふるさとへ、神のもとへ帰る救いの道を歩く人々に、物質的魅力という環境に囚われないようあらゆる經典の教えがしめされています。そして、それはマハートマーという主の献愛者との交流だけが可能にしてくれるものです。天使は生命体たちに矢を放ち、その二人が美しかろうが美しくなろうが、異性を強く求めるよう仕向けます。天使の誘惑は、文化人からすれば醜い姿を持つ動物社会のなかでさえも変わることなくつづけられてい

ます。このように、天使の力はもっとも醜い生物たちのあいだでさえ表わされるのですから、完璧な美しさをそなえた生命体のあいだにあることは言うまでもありません。もっとも忍耐強いとされる主シヴァでさえ、主のモーヒニー (Mohini) の化身に心を奪われたために天使の矢を浴び、自分が誘惑に負けたことを認めました。しかしその天使でさえ、幸運の女神の品格ある、そしてまた魅惑的なふるまいに惑わされ、失敗して弓と矢を捨てます。それが主クリシュナの女王たちの美しさと魅力です。しかしそのかのじょたちでも、主の超越的な感覚を乱すことはできませんでした。これは、主があらゆる面で完璧なアートゥマーラマ (ātmarāma) という自己充足した方だからです。主は、自ら満足するのにだれかに助けをもらう必要はありません。ですから、女王たちは女性的魅力では主を満足させることはできなかったものの、誠実な愛情と奉仕によって主を満足させることができました。純粋無垢で、崇高な愛情奉仕だけが主を満足させることができるのであり、そして主も、かのじょたちの愛情奉仕に喜んで応えようとします。主は、妻たちの無垢な奉仕だけに満足し、情熱的な夫のようにその奉仕に応えます。さもなくば、これほど多くの妻の夫になる必要はどこにもありません。主はだれにとっても夫ですが、主をそのように受け入れる人に、主は応えます。主に対するこのような無垢な愛情は俗な欲情とは比較にもなりません。純粋で超越的な境地なのです。そして女王たちが自然な女性らしさから気品あふれるふるまいをとったこともやはり超越的です。その感情が超越的な法悦の心から表わされたものだからです。先の節ですでに説明されましたが、主は一見ありきたりの夫に見えても、じつは、主の妻との関係は超越的で、純粋で、そして物質自然の様式には穢されていませんでした。

第37節

तमयं मन्यते लोको ह्यस्रामपि सरिणम् ।
आत्मौपम्येन मनुजं व्यापृण्वानं यतोऽबुधः ॥ ३७ ॥

タムム アヤナム マニャテー ローコー
tam ayam manyate loko

ヒ アサンガンム アピ サンギナム
hy asaṅgam api saṅginam

アートウマウパミエーナ マヌジャンム
ātmaupamyena manujam

ヴァープリンヴァーナム ヤトー ブダハ
vyāpṛṇvānam yato 'budhaḥ

tam—主クリシュナに対して; ayam—これらすべて (凡人) ; manyate—心のなかで推測する; lokaḥ—条件づけられた魂; hi—確かに; asaṅgam—執着していない; api—～にかかわ

らず; saṅginam—影響を受けて; ātma—自己; auṣamyena—自己との比較によって; manujam—一般の人々; vyāpṛṇvānam—〜に従事して; yataḥ—なぜなら; abudhaḥ—無知ゆえの愚かさ。

物質主義的で、条件づけられた一般の魂たちは、主を自分たちと同じ人間のひとりであると勝手に考えている。無知なために、主は物質の影響をうける、と考える。じっさいはそうではないのに。

要旨解説

Abudhaḥ(アブダハ)という言葉はこの節で重要な意味があります。愚かで俗な論争者は、無知ゆえに至高主を誤解し、何も知らない人々のあいだで愚かな推論を言いひろめています。至高の主シュリー・クリシュナは根源の人格主神であり、降誕して人々のまえに姿を見せていたとき、神としての完全かつ神聖な力をあらゆる活動をとおしてしめしました。『シュリーマド・バーガヴァタム』の最初の節で説明したように、主は望むことを思いどおりにできるのですが、その行動すべてが至福と知識と永遠性に満たされていました。『バガヴァッド・ギーター』やウパニシャッドで確証されている主の知識と至福に満ちた永遠な姿を知らないおろかな俗人だけが、主を誤解します。主のさまざまな力は自然順序という完璧な計画のなかで実現され、主はその力の代表者をとおしてすべてをなすことで、永遠に、完璧に自立した人物としていつづけます。主はさまざまな生命体に対するいわれのない慈悲心から、自らの力をとおして物質界に降誕します。自然の物質様式という条件にはいっさい影響されませんし、本来の姿で降誕します。心で推測する人々は至高の人物である主を誤解し、説明不可能なブラフマンとして存在する非人格的姿がすべてである、と考えます。そのような考え方も条件づけられた生活から作りだされるものです。自分の能力の範囲を出られないからです。ですから、俗人だけが主を自分の限られた能力で判断しようとし、そのような人は、人格主神が物質自然の様式に決して影響されないことを確信することができません。太陽がいついかなるときでも伝染性の物質に影響されないことを理解できないのと同じです。推論者は、自分が経験した知識という基準と比較してすべてを理解しようとし、そのためかれらは、主も物質に縛られている俗人のように行動するのだから、自分たちと同じ人間であると考えます。主が16,000人、あるいはそれ以上の女性とすぐに結婚できるという事実をよく考えもせずに。このような人々は、貧弱な知識ゆえに物事の一面だけを受けいれて、別の面を受けいれようとはしません。これは、ただ無知のために自分なりの結論に従って主クリシュナを自分と同類のように考えている、ということであり、それは『シュリーマド・バーガヴァタム』の見解からすれば、ばかげており、また信頼できるものではありません。

第38節

एतदीशनमीशस्य प्रकृतिस्थोऽपि तद्गुणैः ।
न युज्यते सदात्मस्थैर्यथा बुद्धिस्तदाश्रया ॥ ३८ ॥

エータドウ イーシャナンム イーシャツシャ
etad īśanam īśasya

ブラクリティ・ストホー ピ タドウ・グナイヒ
prakṛti-stho 'pi tad-guṇaiḥ

ナ ユヅジャテー サダートウマ・スタハイル
na yujyate sadātma-sthair

ヤタハー ブッデヒイス タドウ・アーシュラヤー
yathā buddhis tad-āśrayā

etad—これ; *īśanam*—神性; *īśasya*—人格主神の; *prakṛti-sthaḥ*—物質自然界と接触して; *api*—～にもかかわらず; *tad-guṇaiḥ*—その質によって; *na*—決して～ない; *yujyate*—影響を受ける; *sadā ātma-sthair*—永遠性にいる人々によって; *yathā*—そのままで; *buddhiḥ*—知性; *tat*—主; *āśrayā*—～の保護下にいる人々。

これが人格主神の持つ神聖な特質である。主は物質自然界とかかわっていても、その質には影響されない。同じように、主に身をゆだねた献愛者も物質の影響は受けない。

要旨解説

ヴェーダとヴェーダ文献（シュルティとスムリティ）では、神のうちに物質的な特性は一切ない、と言われていています。主はまったく超越的（ニルグナ・*nirguṇa*）であり、すべてを認識する至高の人物です。ハリ（Hari）・人格主神は、物質的欠陥の範囲を超えた境地にいる至高かつ超越的人物です。この言葉は、アーチャーリヤ・シャンカラさえ確証しています。「主と幸運の女神の関係は確かに超越的かもしれない、しかし、主が誕生したヤドゥ王家との関係、あるいはジャラーサンダとか物質自然の様式に直接かかわっている他のアスラたちとの関係はどうなのか」と反論する人もいるでしょう。その質問に対し、「人格主神の神性さは、どのような状況にあっても物質自然の質とはまったくかわりがない」と答えることができます。主はじっさいにそのような質と接触します、しかし万物の究極の源である主はそのような質の動きを超えています。そのため主はヨーゲーシュヴァラ（Yogeśvara）「神秘的力の主」という名前で知られていますが、それはあらゆる力を持つという意味も含まれています。主の博識な献愛者たちも物質自然の様式の影響を受けません。ヴリンダーヴァンの偉大な6人のゴースヴァーミーはひじょうに裕福で高貴な家族の生まれで、修行僧の

生活をはじめるとき、見かけはみじめな生活をしているように見えてましたが、じつは精神的な価値をすべてそなえていました。そのようなマハー・バーガヴァタ (mahā-bhāgavata) ・一流の献愛者は、人々にまじって活動していても、名誉や侮辱、飢えや満足、眠りや弱さといった物質自然の三様式の結果としてあらわれるに気質に穢されることはありません。同じように、なかには世俗的な交流にかかわっている献愛者もいますが、その影響を受けているわけではありません。このようなバランスのとれた生活ができなければ、超越性に位置されているとはいえません。神と神の交流者はおなじ超越的境地にあり、両者の栄光はいつでもヨーガマーヤー (yogamāyā) という主の内なる力の動きによって神聖になっています。主の献愛者は、ときには墮落した振る舞いをしているように見えてもいつでも超越的です。主は『バガヴァッド・ギーター』(第9章・第30節)で、純粹無垢な献愛者は過去の物質的穢れのために墮落したとしても、なおかつ、完全に超越的な境地にあるとされています。それは、主への献愛奉仕に100パーセント打ちこんでいるからです。主は、主への奉仕にいつも励んでいる献愛者をいつも守り、墮落した状態に陥っても、それは不慮のできごと、あるいは一過性のものと判断されます。すぐに消えさっていくものなのです。

第39節

तं मेनिरेऽबला मूढाः स्वैणं चानुव्रतं रहः ।
अप्रमाणविदो भर्तुरीश्वरं मतयो यथा ॥ ३९ ॥

タンム メーニレー バラー ムーダハーハ
tam menire 'balā mūdhāḥ

ストウライナンム チャーヌヴラタンム ラハハ
straiṇam cānuvratam rahaḥ

アプラマーナ・ヴィドー バハルトウル
apramāṇa-vido bhartur

イーシュヴァランム マタヨー ヤタハー
īśvaram matayo yathā

tam—主シュリー・クリシュナに; menire—それを当然のことと考えた; abalāḥ—優雅な; mūdhāḥ—純真さゆえに; straiṇam—妻に支配される者; ca—もまた; anuvratam—従者; rahaḥ—孤立した場所; apramāṇa-vidaḥ—広大な栄光に気づいていない; bhartuḥ—自分たちの夫; īśvaram—最高の支配者; matayaḥ—論題; yathā—ありのままの。

純真でしとやかなかのじよたちは、夫である主シュリー・クリシュナが自分たちに従い、そして支配されているものと考えていた。主が至高の支配者であることを無神論者が知らないように、夫の果てしない栄光を知らなかったのである。

要旨解説

主シュリー・クリシュナの超越的な妻たちでさえ、主のはかりしれない栄光を知りつくしてはいませんでした。しかしこの無知は俗なものではありません、なぜなら主と主の永遠な交流者が交わす感情には、主の内なる力が働いているからです。主は、所有者、主人、友人、息子、愛人という5種類の超越的関係をとおして献愛者と気持ちを交わし、それぞれの娯楽においてヨーガマーヤー (yogamāyā) ・内なる力をとおして自らを完全にしめします。主は、同等の立場にいるひとりの友だちとして牛飼いの男の子たちと遊び、あるいはアルジュナのような友人と行動します。ヤショーダーマターのいるまえではその愛息のように、また牛飼いの乙女たちのまえではまさに恋人のように、そしてドゥヴァーラカーの女王たちのまえでは夫のようにふるまいます。主のそのような献愛者たちは、主を至高主とは決して考えてはおらず、あたかもふつうの友人として、愛息として、あるいは恋人、夫、そして身も心も捧げた相手のように考えています。それが主と、そして無数のヴァイクンタ惑星で満たされた精神界で主の交流者として交わっている超越的な献愛者たちの関係です。主が降誕するときは、超越的世界の全貌をしめすために現われます。その世界には、主の創造界を支配しようという俗な感情はなく、主への純粋な愛情と献身だけが広がっています。主のそのような献愛者はすべて、外的な力に左右されない中間あるいは内なる力を完璧に表わしている自由な魂たちです。主クリシュナの妻たちは、主の内なる力のために主の計りしれない栄光を忘れていました。そうすることで感情の交換が妨げられないように、また妻たちが主のことを、だれもいないところでは自分の言うとおりになる夫と考えるように。言いかえると、主と身近に交流している献愛者でも、主のことを完全には知らないということですから、評論家や推論家に主の崇高な栄光がわかるもののでしょうか。推論者は、主が創造の原因であること、創造の材料を提供していること、創造の物質的・卓越した原因である、などとさまざまな理論を展開しますが、どれも主に関する部分的知識にすぎません。じつは、かれらも一般人と同じほど主のことを何も知らないのです。主のことは、主の慈悲があつてこそ理解できるのであり、ほかの方法ではわかりません。しかし、主の妻たちとのかかわり方は純粋な愛情と献身にもとづいているため、どの妻も物質的な穢れの一切ない超越的な境地にいるのです。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第11章、「主クリシュナ、ドゥヴァーラカーに入る」の要旨解説を終了します。